

2016年2月1日

みずほディーラーズアイ (2016年2月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 119.00 ~ 125.00

国際為替部 為替営業第二チーム 佐藤 雅英

■ 先月の為替相場

1月のドル/円相場は、中国景気の先行き不透明感を背景にリスク回避志向が高まり115円台後半まで下落した後は、日銀の追加緩和期待及びマイナス金利導入を受け121円台後半まで上昇する展開となった。

年初4日に120円台前半でオープンしたドル/円は、中国12月製造業購買担当者景気指数(PMI)が市場予想を下回り世界同時株安となる中、中東情勢の緊迫化も相まってリスク回避志向が強まると、7日にかけて117円台前半まで下落した。8日には、市場予想を大きく上回る米12月雇用統計の結果等を受けて118円台後半まで反発する場面も見られたが、リスクセンチメントの回復には至らず、117円台前半まで下落した。

11日は、東京市場休場の中、116円台後半まで下落したが、中国当局の発言を受けてリスク回避姿勢が和らぎ、118円台に乗せる場面も見られた。13日には、中国12月貿易統計が市場予想を上回り、リスク回避ムードが一旦後退すると、118円台前半まで上昇。しかし、ページブックの結果を受けドル売りが強まると、14日にかけて117円台前半まで下落。15日も、米経済指標が冴えない結果となり116円台半ばまで続落した。

18日は、人民元の基準値が元高水準に設定されたことを受けてリスク回避の動きが後退すると、19日にかけて118円台前半まで上昇した。20日になると日経平均株価が下げ幅を拡大する中、甘利経済再生担当相を巡る政治資金問題が報道されて日経平均先物が暴落すると、月安値115.97円まで下落した。しかし、21日には、ECB理事会後の記者会見でドラギ総裁が追加緩和を示唆しユーロ/ドルが下落すると、117円台後半まで上昇。22日には、日銀による追加緩和観測が高まり、118円台後半まで続伸した。

25日は、月末を控えた輸出企業のドル売りが優勢となり、上値重く推移。26日には中国株が8月の安値を下抜けて急落する中、117円台後半まで続落した。27日になると、FOMCを控えドル買い優勢の展開に119円台を回復する場面も見られた。FOMCでは声明文が市場予想の範囲内となり、為替相場への影響は限定的だった。29日は、日銀金融政策決定会合で当座預金にマイナス金利を適用する追加緩和を決定したことで121.70円まで急騰し、121円台前半でクローズした。

■ 今月の見通し

2月のドル/円相場は、日米金融政策格差拡大を背景に堅調な展開を予想する。

先月開催されたFOMCでは、景気認識について、昨年後半減速したとの表現が加えられると共に労働市場の改善は続いていると強調した。一方、先行き見通しでは、緩やかな拡大が続き、労働市場はさらに引き締まるとの見方が維持された。また、金利ガイダンスでは、労働市場、インフレ期待、金融・海外情勢を含む広範なデータから判断するとしつつ、利上げペースは緩やかとの文言が維持されている。昨年12月に利上げを実施した後、金融政策の見通しでは「年4回」がFOMCメンバーのコンセンサスになっており、米景気の減速リスクが高まらなければ、3月の追加利上げを模索することになりそうだ。今月は、米重要経済指標や要人発言を手がかりに利上げの可能性を値踏みする月となるだろう。

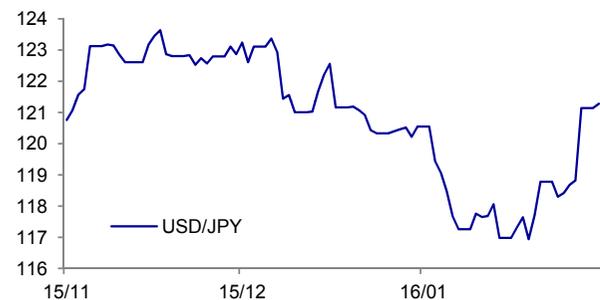
一方、先週末に開催された日銀金融政策決定会合では、当座預金にマイナス金利を適用する追加緩和を決定した。また、黒田日銀総裁による記者会見では、今後必要な場合には「量」・「質」・「金利」の3つの次元で追加的な金融緩和措置を駆使し、物価目標の早期実現を図るとした。市場参加者の多くは、今回会合での追加緩和と実施は想定しておらず、サプライズとなっただけでなく、今後も状況に応じて追加緩和が実施される可能性を確認したことから、投機的に円買いを仕掛けることは難しくなった印象だ。

需給動向に目を向けると、本邦では多くの企業が、3月の年度末を控え海外現地法人からの配当金を吸い上げる所謂レバトリの動きが出てくるのが想定される。また、2月は来年度の想定レートを決定する事業法人も多く、世界経済の先行き不透明感を背景に円高リスクを警戒する企業は、早めにヘッジに動くことが想定されることもドル/円の上値を押さえることになりそうだ。

以上より、日米金融政策格差拡大への連想からドル/円は上昇することが見込まれるものの、本邦企業による年度末を控えた円買い需要を背景に、緩やかな上昇を予想したい。

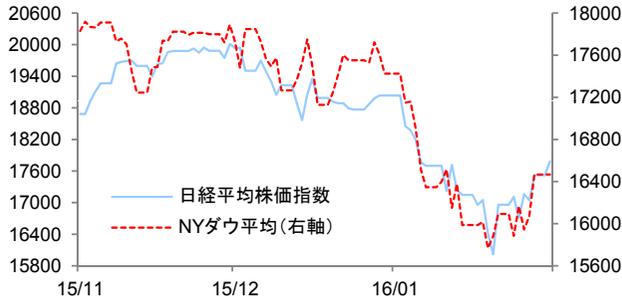
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	米ISM製造業	12月	49.0	48.2	48.6
1/6	米ISM非製造業	12月	56.0	55.3	55.9
1/8	米非農業部門雇用者数	12月	200K	292K	211K
1/8	米失業率	11月	5.0%	5.0%	5.0%
1/15	米小売売上高(前月比)	12月	▲0.1%	▲0.1%	0.20%
1/27	FOMC政策金利	1月	0.50%	0.50%	0.50%
1/29	日全国CPI	12月	0.3%	0.3%	0.3%
1/29	日銀金融政策決定会合	12月	当座預金にマイナス金利を導入		
1/29	米GDP(年率/前期比)	4Q	0.8%	0.7%	2.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (5名、 117.50～125.00、 中心118.00～124.00)

加藤	118.50 ～ 123.50	黒田日銀が強い覚悟をもってインフレ期待を醸成しようとしていることを改めて内外に示すことになったマイナス金利の導入であり、政府・日銀が一丸となってアベノミクスを推進する宣言であるとも言える。他方、マイナス金利とは麻薬や劇薬とも言え、長期的にどう評価されるのかは疑問である
高田	118.00 ～ 124.00	日銀による追加緩和に加えて、FRBが利上げ姿勢を維持しており基本的には良好な米経済指標に応じてドル高相場が予想される。ただし、原油安や株安等のリスクオフムードが高まる局面では一時的に円高に振れやすいと思われるが限定的であろう。
佐藤	119.00 ～ 125.00	日銀が追加緩和に踏み切ったことで、日米金融政策格差拡大を背景にドル/円は上昇しそう。ただ、3月の年度末を控えた配当金等の吸い上げ(所謂レバトリ)や来年度の想定レートを決定した企業が早めにヘッジに動くことも想定され、ドル/円は緩やかな上昇を予想する。
尾身	117.50 ～ 123.50	日銀が追加緩和に踏み切ったことでドル/円のレベルが切り上がった。先月は”ドル高”の巻き戻しから一時116円を割り込む円高局面も見られたが、日銀の積極的な緩和姿勢がドル/円相場120円レベルをサポートするだろう。
西谷	118.00 ～ 125.00	先月の日銀政策決定会合においてサプライズでマイナス金利が導入された。ECBがマイナス金利を導入した際に見られた通り、マイナス金利が通貨安を促進するのに一定の効果が期待できることは実証されている。今後、日米金利差が拡大するとの見方からドル/円は上方向への展開を予想する。

■ドル・ベア (6名、 115.00～123.00、 中心115.75～122.00)

藤崎	116.00 ～ 123.00	日銀のマイナス金利導入はサプライズだが、適用が当座預金残高の一部に留まることから効果は限定的。中国を震源地とするグローバルなリスク回避の動きに歯止めがかからず、FRBの利上げシナリオも修正を迫られ、ドルの上値は重くならう。
山下	115.00 ～ 122.00	超過準備付利下げすら予想されていなかった中での日銀マイナス金利導入はかなりのサプライズだったにもかかわらずドル/円の上昇幅は3円程度であり、中国・原油等の不安材料を抱えた市場の懐疑心は消えていない模様。ドル/円の上値は限定的と見る。
矢野	117.00 ～ 122.00	日銀はマイナス金利導入(追加緩和)に踏み切ったものの、米追加利上げに対する懐疑的な見方の高まりやグローバル景気に対する不透明感の台頭から上値の重さが意識される展開を予想。
西島	115.00 ～ 122.00	1月末の日銀マイナス金利導入はサプライズ、円安軌道へ回帰との指摘が見受けられるも、止まらない原油安、中国情勢などを背景に世界経済下方リスクが煽る状況下で、一段のドル/円上昇は期待し難い。米利下げベース鈍化も意識され、ドル/円は上値の重い相場展開が続くそう。
下山	116.00 ～ 123.00	日銀がマイナス金利を導入し、更なる引き下げ余地を示したことで政策の打ち止め感等は一旦払拭されただろう。しかし、行き過ぎれば金融引締めにも繋がりがうる劇薬のはず。結局は限界を意識され、また米国の利上げベース鈍化の可能性や世界的なリスクセンチメントの悪化から徐々に上値が重くなるだろう。
森谷	115.50 ～ 122.00	日銀がサプライズでマイナス金利導入を決定。インパクトの強い内容のため発表後は急騰して反応も、マイナス金利導入の効果は不透明。株式市場や原油価格の動向に対して依然として懸念が残る上、米国の追加利上げ観測も後退していることから次第に上値の重い推移になると予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0300 ~ 1.1000
EUR/JPY 126.00 ~ 133.00

国際為替部 為替営業第二チーム 坂本 真史

■ 先月の為替相場

1月のユーロ相場は、ユーロ/ドルは1.07-1.09台、ユーロ/円は126円-132円台での推移し、方向感の出にくい相場展開となった。

月初、ユーロ/ドル1.08台半ば、ユーロ/円130円台半ばでオープン。中国株式市場がサーキットブレーカーの発動で取引停止となったこと、中国人民銀行(PBoC)が基準値を4年7か月ぶりの元安水準に設定したこと、米司法省が独自動車大手の排ガス不正操作問題で連邦地裁に最大2兆円規模の賠償金支払を求める民事訴訟を起こしたこと等でドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは月間安値となる1.0711まで下落。しかし、週央6日に発表されたFOMC議事要旨が予想されたほどタカ派な内容ではなかったことでユーロは反発。7日にはユーロ/ドルは1.09台半ばまで上昇した。

11日週はユーロ/ドル1.09台前半、ユーロ/円128円ちょうど近辺でオープン。その後ユーロ/ドルは1.08台半ばまで下落。しかし、原油価格が30ドルを割り込む展開にリスク回避姿勢が強まるとユーロショートポジションの巻き戻しからユーロ/ドルは1.08台後半まで上昇。更に「ECB理事会メンバーが目先の追加緩和と懐疑的」と報道されると、15日にはユーロ/ドルは月高値となる1.0985まで上昇した。

18日週はユーロ/ドル1.09台前半、ユーロ/円127円台半ばでオープン。19日に独与党の支持率が2013年以來の低水準となったこと等からユーロ/ドルは1.08台半ばまで下落。その後、原油相場下落を背景にユーロショートポジションを巻き戻す動きが強まり、ユーロ/ドルは1.09台後半まで上昇した。しかし、21日のECB理事会後の記者会見でドラギECB総裁から「今年に入ってからダウンサイドリスクが強まった」、「3月に政策スタンスについて再検討する」との発言がなされる等3月の追加緩和を強く示唆する内容であったことからユーロ/ドルは1.07台後半まで急落。また、ユーロ/円は22日のドラギECB総裁の発言を受けてユーロ/ドルが下落すると、月間安値となる126.17円をつけた。

25日週はユーロ/ドル1.08ちょうど近辺、ユーロ/円128円台前半でオープン。27日に発表されたFOMC声明文で3月の利上げの可能性が排除されなかったものの前週の戻りを試すような展開となり、ユーロ/ドルは1.09台後半まで反発した。29日には日銀がサプライズ緩和を発表してドル/円が急騰するとユーロ/円も連れ高となり、月間高値となる132.45円をつけ、131円台前半でクローズした。但し、ユーロ/ドルへの影響は限定的で、ユーロ/ドルは1.08台半ばでクローズした。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は引き続き方向感の出にくい展開になるものの、上値は重いと予想する。

注目されたECB理事会の1月会合では金融政策の変更は行わなかったものの、会合後のドラギECB総裁の記者会見では随所に欧州における低インフレの長期化への懸念を示すとともに、3月会合での金融政策スタンスの見直し・再検討を行う必要があると表明した。その後、ドイツでの講演においても、一部に出ている「低金利政策により資産バブルの発生につながる恐れがある」との指摘に対し、同総裁は「深刻な金融不安定化の兆しは出ていない」と表明するなど、3月会合での緩和実施に前向きであるとの印象を持つ。昨年10月22日のECB理事会において緩和を示唆したことで、ECB理事会の昨年12月会合開催前までに市場ではECBの追加緩和期待が大きく膨らみ、同会合で予想を下回る内容の緩和策が発表されるとユーロが急激に買い戻されたことは記憶に新しい。そのためか今回のドラギ総裁の発言を受けてもユーロは当時ほど売り込まれてはいない。とはいえ、緩和観測が意識される環境下、積極的にユーロが買われる展開は描きにくいだろう。

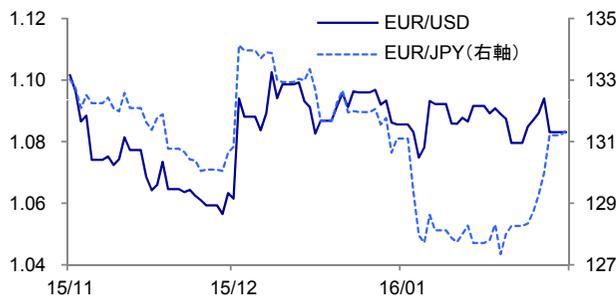
また、米国に目を移すと、先月27日に発表されたFOMC声明文からは3月利上げの可能性を排除していない。利上げを実行するかは、結局は今後発表される同国の経済指標の結果次第ではあるものの、FRBメンバー内で米国の3月利上げの可能性が残存していることはユーロ/ドルの上値を抑える要因となるだろう。

但し、此処もとのユーロ相場はリスク回避ムードとなるとユーロショートポジションが巻き戻され、ユーロが上昇する傾向にある。先月も例えば原油価格が下落するタイミング等ではこの動きが見られた。原油価格は先月下旬にOPECとロシアが減産に向けて協議をするとの観測から下げ止まったように見えるものの、予断を許さない状況が続いている。仮に協議がなされない、或いは破談となることになれば原油価格が一段と下落し、ユーロが買い戻される可能性を否定はできない。

しかしながら、3月に欧州のECB理事会と米国のFOMCというイベントを控えていることから明確な方向感が出にくく、基本的には両イベントでのECB追加緩和、米利上げという可能性からユーロの上値は抑えられる相場展開になると考える。

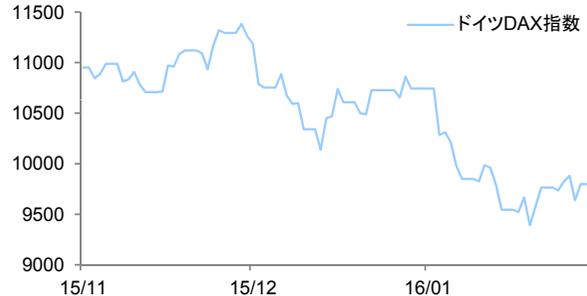
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	欧 製造業PMI(確報)	12月	53.1	53.2	53.2
1/5	欧 CPI (前年比)	12月	0.3%	0.2%	0.2%
1/7	欧 消費者信頼感・確報値	12月	-5.7	-5.7	-5.7
1/7	欧 失業率	11月	10.7%	10.5%	10.6%
1/7	欧 小売売上高(前年比)	11月	2.0%	1.4%	2.4%
1/15	欧 貿易収支	11月	23.0B	23.6B	24.2B
1/19	欧 経常収支(季調前)	11月	-	29.8B	27.5B
1/22	欧 製造業PMI(速報)	1月	53.0	52.1	53.2

(資料) ブルームバーグ

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (4名、1.0700 ~ 1.1500、中心1.0725 ~ 1.1325)

藤崎	1.0700 ~ 1.1500	ECBによる追加緩和は内部でのコンセンサスが困難。リスク回避に市場が傾き、米製造業へのドル高が及ぼす悪影響の懸念から、米利上げに打ち止め観測が漂う。投機筋のユーロショートポジションの大規模な手仕舞いによるユーロ反発を予想。
矢野	1.0800 ~ 1.1200	3月にもECBの追加緩和が想定される状況下、積極的な買いは期待しにくい。ただ、足許では一旦原油相場が下げ止まりを見せていることもあり過度の期待インフレ率低下懸念は後退しているほか、米利上げに関する懐疑的な見方も相場のサポート材料となる。
尾身	1.0750 ~ 1.1250	ユーロ堅調地合いは継続を予想。また日銀がマイナス金利の導入を決定したことでユーロ円は130円レベルを維持しやすくなると考える。より踏み込んだ決定を行った日銀との対比でユーロが買われる局面も多々見られるだろう。
下山	1.0700 ~ 1.1400	ユーロの底堅さが増している印象。ECB内部の軋轢等から追加緩和への期待感が低下していることに加え、米国の利上げ期待もトーンダウンしつつあることが背景だろう。大幅な経常黒字を金融政策の期待感で押し下げたいこれまでの構図に変化が見られつつあると考えている。

■ ユーロ・ベア (7名、1.0400 ~ 1.1100、中心1.0500 ~ 1.1100)

加藤	1.0400 ~ 1.1100	基調は変わらずユーロベアで考えたい。ただし、原油価格がそろそろ底値を形成しそうな動きを見せており、その場合は巨大なユーロショートポジションの調整が見られるかも知れない。
山下	1.0400 ~ 1.1100	ユーロ安等によるユーロ圏景気の持ち直しも中国景気減速により打ち消されている。直近のドラギ総裁の3月追加緩和を匂わす発言は、「予告⇒政策変更」というプロセスを踏んでいる最近のECBの手法に基づくもの。ECB追加緩和を含みにユーロはダウントレンド。
高田	1.0600 ~ 1.1100	ECBによる追加緩和期待を材料に軟調を予想。原油安等を受けた期待インフレ率の低迷やECBの要人発言等からユーロが売り込まれるであろう。ただ、ユーロ売りポジションも相応に積み上がっており下値は限定的であろう。
佐藤	1.0500 ~ 1.1100	ECBは3月理事会での追加緩和を予告しており、2月は追加緩和の内容について要人発言等で見極めるステージになりそうだ。追加緩和期待を背景にユーロは上値の重い展開を予想する。
西島	1.0500 ~ 1.1100	原油安や中国情勢などの事態悪化があればリスク回避局面でのユーロショートカバーによる一時的な上昇は不可避と思われるも、前回ECB理事会後のドラギ総裁会見にて示唆された追加緩和への思惑がユーロ相場の重石となり、下値を探る場面が相次ぐと見られる。
西谷	1.0600 ~ 1.1100	リスクオフ地合の進行を背景に、ポジション調整に伴うユーロの急激な買い戻しの動きには十分注意する必要があると思うものの、3月ECB理事会において、現状の金融政策について再検証を行なう方針を示しており、基本目線は引き続きユーロ・ベアに見ていきたい。
森谷	1.0500 ~ 1.1100	3月の追加緩和が意識される中、ユーロは下落する展開を予想。1月理事会後も底堅い推移となっているが、12月理事会前同様に具体的な追加緩和策についての報道やECB関係者による発言をきっかけにユーロ売りが進行する局面が見られると予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.4200 ~ 1.4800
GBP/JPY 169.00 ~ 175.00

欧州資金部 本多 秀俊

■ 先月の為替相場

1月のポンド相場は続落。対ドルで7年弱ぶりの安値となる1.4080(21日)まで下落した他、対円で約2年ぶりの安値となる163.99(20日)、対ユーロでも1年ぶりの安値となる0.7756(20日)と、主要通貨に対して全面安に振れた。ポンド急落の先鞭はポンド/円がつけた。年明け金融市場は中国経済減速懸念で始まり、世界的な株安、原油価格下落に、リスク回避の円全面高が進んだ。ポンド/円が殊更売込まれた背景としては、中東産油国政府系ファンドのポンド建資産売却の影響が聞かれた。原油価格が12年超ぶりの安値に落ち込んだことで、英資産に大きく投資していた中東筋が、財政赤字補填(手元現金確保)の為に同資産の売却に動いたとの観測だ。そうした動きは、昨年9月頃から囁かれ始めていたが、今般、サウジアラビア国営石油IPOの可能性などが観測されるにつれ(8日)、広く認識されるに至った模様。更に19日には、カーニーBoE総裁が「今はまだ利上げの時ではない」と言明。この発言は、同日、英12月コアCPIが前年比+1.4%と市場予想(同+1.2%)を明確に上振れた直後に伝えられ、殊更ポンドの地合を悪くしたように見えた。また、同総裁は26日にも3月の財政政策委員会(FPC)における反景循環緩衝(CCB)の引き上げを示唆したが、これも、過度の資産価格上昇を、利上げではなくマクロブルーデンシヤル政策で牽制しようという趣旨で、同じ文脈の(利上げに消極的な)発言と言えた。しかし、前後してポンドは底打ち上昇。この値動きも英要因とは直接関係のない、原油価格の底打ち反転に牽引された値動きに見えた。原油価格反発は、21日、ECBドラギ総裁が3月の理事会における追加金融緩和の可能性を示唆したことが大きな押し上げ要因になったものと受け止められた。前後して、1月末(29日)の日銀金融政策決定会合における追加緩和期待も高まり、主要中銀による追加金融緩和に対する期待感が、世界的な株価を持ち上げ、原油価格の反発を促したものと考えられた。この間発表された英経済指標などでは、上述12月コアCPIの上振れの他は、11月製造業/鉱工業生産の低迷(12日)、9~11月平均賃金の低迷(20日)、12月小売売上高の下振れ(22日)など弱目の数字が目をつけた。BoE首脳も、21日にはウィール委員が早期利上げに積極的と読める発言をしたが、18日にフリーヘ委員、25日にフォース委員が利上げ開始に慎重な発言をしており、押し並べて利上げに消極的な姿勢が目立った。ただ、原油価格動向が金融市場全般の耳目を集める環境下、こうした数字や発言にポンドが強い関心を示した様子はほとんど読み取れなかった。

■ 今月の見通し

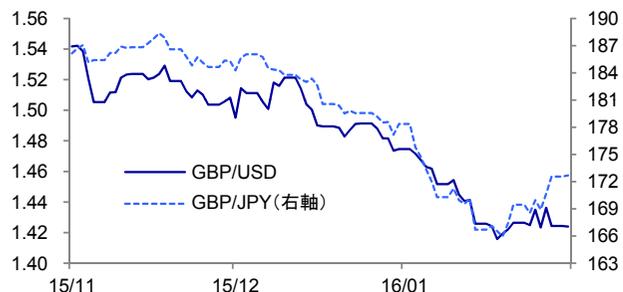
2月のポンド相場は、世界的な株価、原油価格の反発基調を前提に堅調推移を予想。年初来の株価下落、原油価格下落は中国経済の減速懸念を主因に進んだと目されたが、中国経済そのものは、従来の高成長から見れば確かに減速しているものの、引き続き実質前年比+6.3%といった成長(2016年/1月19日のIMF予想)が見込まれている。足許人民元安を勘案しても、引き続き中国が生み出す(ドル建)総需要は拡大しているはず。従来から、余程強い成長が見込まれていたのならばともかく、中国の成長減速が言われて久しい昨今で、ここまで急激に世界的な株安や原油価格下落を引き起こすのは些か腑に落ちない。原油価格に関して言えば、米国内原油生産(シェール)やロシア原油生産の縮小は昨年後半以降明確になっており、イランの原油供給の復興に対する見通しも楽観が過ぎるように感じる。つまり、需要面から見ても、供給面から見ても、昨今の原油安には行き過ぎの感が強く、需給を超えた投機的な思惑が価格を押し下げた可能性は十分に考えられる。それでも、ポンドの先行きにいまひとつ強気になれないのは、BoEの腰が座っていないのが一因。金融政策(=利上げ)の代わりにマクロブルーデンシヤル政策で資産バブルを牽制しようというのは、14年6月にカーニー総裁が「市場の織り込みよりも早期の利上げ」を予告した「マンションハウス発言」以前に、BoEが盛んに強調していた政策論理。その後、1年半の「必要以上にタカ派的な姿勢」の期間を経て(昨年7月にもカーニー総裁は唐突に早期利上げを予告)、BoEが再びマクロブルーデンシヤル政策に傾倒すると宣言されても、その真意は読みかねる。今後、想定通りに原油価格が回復するのであれば、「中東筋のポンド売りに便乗した投機筋のポンド売りの駆逐」「物価上昇を受けたBoE利上げ観測の高まり」というふたつの経路からポンドの押し上げ材料になって然るべきだが、後者に関しては、現時点でそこまでの筋書きを描けない。もうひとつ、2月中に注目しておきたいのは、18~19日に予定されるEU首脳会合。英政府の求めるEU改革の詳細が詰められるはずで、その結果次第でEU残留の是非を問う英国民投票の日程が固まってくる可能性も考えられるからだ。今月の首脳会合で、英世論をEU残留に大きく引き寄せられるほどの譲歩が得られる可能性は低いものと見込んでおり、国民投票の実施時期は(現在有力視されている今年6月から)先送りになる可能性が高いものと見込む。仮に、拙速に国民投票実施が決められた場合、目前に横たわる大きな不透明感はポンドの大きな重石になる可能性の方が高いのではないかと。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』
英国と言えば「紅茶」の国。「東インド会社」「大英帝国」と連想は広がりますが、当地で紅茶が盛んに飲まれたのは20年ぐらい前までの話です。当時のロンドンでは(今でも)、お茶というのは文字通り「日常茶飯事」に家庭で振舞われるもので、いわゆる喫茶店(Tea House)のようなものはほとんどなく、お酒を飲まない人たちはどこで待ち合わせをするんだろう?と不思議に思ったものです(お酒を飲む人は、当然、パブで待ち合わせます)。それが、20年ほど前から様変わり始めたのは、コーヒー専門店の進出が始まったからです。当時、大西洋の対岸からは、シアトル発のカプチーノ、カフェラテなどが世界に版図を広げていたはずですが、ロンドンで最初に覇権を握ったのは、当地で産声を上げたコーヒー専門店でした。当時、昼過ぎになると、若いトレーナーが「カッポ(カプチーノ)」だの「ラテ(カフェラテ)」だの注文を取って、チーム全員分のコーヒーを買いに行ったもので、あの時代、ロンドンでコーヒーを飲むのは、「ちょっとお酒落なこと」だと思われていたのではないのでしょうか。それからは、あれよと言う間に、各種コーヒーショップの進出が始まり、今では、街中でS社、P社、C社のコーヒーショップのない通りを見つけないのが難しいほどです。例えば、「〇〇駅の△△(コーヒーショップ)」で待ち合わせとかするのなら、どの通りの△△なのか正確に確認しないと、駅の周辺だけでも同じチェーンの店が3軒も4軒もあるなどということばざらにあります。残念なのは、入れ替わりに、紅茶を飲む習慣がすっかり廃れてしまったことで、「アフタヌーン・ティ」などたしなむ際以外、紅茶を飲む機会はめっきり減っています。「ちょっと今日はコーヒー気分じゃない」という時でも、ミントティとかフルーツティなどノンカフェインの選択肢に向かう人が多く、イギリス人の日々の生活の中からは、紅茶はすっかりその存在感を潜めてしまったようです。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/8	貿易収支(百万ポンド)	11月	-2700	-3170	-3507
1/12	鉱工業生産(前年比)	11月	1.7%	0.9%	1.7%
1/12	製造業生産(前年比)	11月	-0.8%	-1.2%	-0.2%
1/14	英中銀基準金利		0.50%	0.50%	0.50%
1/19	消費者物価指数(前年比)	12月	0.2%	0.2%	0.1%
1/20	ILO失業率	9-11月	5.2%	5.1%	5.2%
1/20	週平均賃金上昇率(前年比)	9-11月	2.1%	2.0%	2.4%
1/22	小売売上高(含自動車/前年比)	12月	4.4%	2.6%	4.5%
1/28	GDP(前年比)	4Q A	1.9%	1.9%	2.1%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6700 ~ 0.7250
AUD/JPY 83.00 ~ 88.00

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

1月の豪ドルは、7年ぶり安値となる0.6827を付けた。

年初4日、豪ドルは0.73ちょうど近辺でオープン。しかし、根強い中国景気減速懸念から上海株を筆頭に世界的な株安となり、豪ドルは0.71半ばに急落。6日には、北朝鮮が核実験に踏み切ったことが嫌気されリスクオフの動きが広がると、豪ドルは0.70半ばまで値を下げた。更なる中国人民元安と中国株急落を受け、一段とリスク回避の動きが広がり、豪ドルは0.69台に下落。8日、米12月雇用統計は非農業部門雇用者数が+29.2万人増加(予想+20.0万人増加)となり、米ドル買い優勢の中、豪ドルは0.69台で軟調推移した。14日、豪12月雇用統計において、雇用者数はほぼ市場予想通りの▲1.0万人減少となったことから為替市場への影響は限定的。翌日、世界主要株の下落と原油30ドル割れを受けて、豪ドルは7年ぶり安値となる0.6827まで下落した。

月前半の世界景気減速懸念の高まりを背景とした株価下落を受けて、豪ドルは0.68台で横ばい推移。19日、中国10～12月期GDPは予想とほぼ同数値の前年比+6.8%のプラス成長となったため、豪ドルへの影響は限定的で、豪ドルは0.68台半ば～0.69前半で推移した。しかし、21日、欧州中央銀行(ECB)理事会終了後のドラギECB総裁の記者会見にて、次回会合(3月会合)での追加緩和の可能性が示唆され、欧州株を筆頭に世界的に株高に一転した。それを受け、豪ドルも0.70台を回復。26日、上海株の急落(前日比▲6.4%安)より、豪ドルも一時0.69前半に反落するも、売り一巡後は0.70台に再び浮上。翌日、豪10～12月期の消費者物価指数(CPI)は前期比+0.4%、前年比+1.7%上昇(予想:+0.3%/+1.6%)となり、豪準備銀行(RBA)の追加緩和と観測が後退。更に原油の上昇も相俟って、豪ドルは0.70後半に続伸。28日、原油の3週間ぶり高値や2014年8月以来の低水準となった米12月耐久財受注を受けて、豪ドルは一時0.71前半まで上昇。月末、日銀がサブプライズとなるマイナス金利導入を決定すると、日経平均株価が500円高になる等リスク選好の動きが強まり、豪ドルは高値0.7142まで急伸。その後、値をやや落として、結局0.70後半で越月。

■ 今月の見通し

2月の豪ドルは引き続き下値テストの可能性あり、商品価格動向に注目。

豪10～12期CPIは前期比+0.4%、前年比+1.7%上昇(予想:+0.3%/+1.6%)となった。豪中銀が政策運営で注視する基調インフレ率(=(トリム平均値+加重中央値)÷2)は前期比平均:+0.55%、前年比平均:+2.0%となり、約4年ぶりの低水準を記録したものの、中銀のインフレターゲットレンジ(2～3%)の下限には留まった。また、豪10月と11月の雇用者数は予想を大幅に上回る増加となり、昨年のRBAの2回の利下げが功を奏して、豪労働市場は底堅く推移していると考えられる。更に、昨年11月、スティーブンスRBA総裁は「政策金利引き下げは以前ほど刺激効果が無いとし、追加緩和が景気支援に最も効果的な方法か疑問視している」との意向を示した。以上のことから、RBAはしばらく金融政策を維持するだろう。

一方、米国は、昨年12月に発表されたFOMCメンバーの政策金利見直し(ドットチャート)では年4回の利上げが示された。FOMCは年8回ある中、1月のFOMCでは利上げが見送られたため、次回3月会合で利上げが行われるかが、市場参加者の最大の関心事項となる。現状、FF金利先物市場では3月の利上げは約30%の織り込みに留まる。

以上のことから、豪州は金融政策の維持、米国は次回FOMCが3月のため2月は金融政策の変更はなく、各国の金融政策による豪ドル相場への影響は限定的となろう。

しかし、年初から商品市況の下落スピードが加速している。特に、NY原油先物は1月に38ドル→28ドル(▲26%)まで急落した。豪州の主要輸出品目である鉄鉱石と石炭の下落は小幅なものに留まるものの、商品総合インデックスであるCRB指数は▲15%下落した。特に、原油は、1月下旬には供給側の生産調整懸念より、一時的に小反発しているが、中国など需要側の景気減速懸念は根強く、商品価格は軟調な展開が継続しよう。商品通貨とされる豪ドルも下押し圧力がかかりやすいだろう。

2月の豪州注目指標は、RBA理事会(2日)、貿易収支(3日)、小売売上高とRBA四半期金融政策報告書(5日)、雇用統計(18日)。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

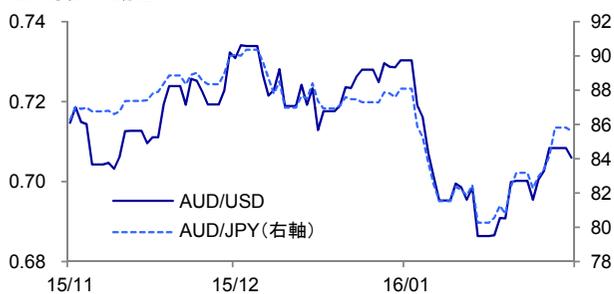
オーストラリアでは、80年代後半に、主にイタリア系の人々によって、ラテやカプチーノといったエスプレッソ系ドリンクを提供するカフェが次々と現れました。

少し古い統計になりますが、2012年の1年間で21億杯を超えるコーヒーが購入され、これを同国の同年人口2,268万人で割ると、1人当たり約93杯のコーヒーを飲んでいきます(出典:全日本コーヒー協会)。

また、オーストラリアには数多くの種類のコーヒーがあります。①ショート・ブラック/エスプレッソ:エスプレッソのストレート。②ロング・ブラック:熱湯にエスプレッソを注いだもの。③カフェ・ラテ:エスプレッソに、温めたミルク(スチームドミルク)と、クリーミーにきめ細かく泡立てたミルク(フォームドミルク)を注いだもの、温めたミルクの方が多い。④カプチーノ:エスプレッソ、スチームドミルク、フォームドミルクを同量ずつ入れたもの。⑤フラット・ホワイト:フォームドミルクではなく、泡のない(フラットな)温めたミルクを入れたコーヒー。⑥カフェ・モカ:エスプレッソにチョコレートを入れてスチームドミルクを注ぎ、上にフォームドミルクやホイップクリームをのせた甘い飲み物。⑦アイスド・コーヒー:日本より暑いオーストラリアですが、コーヒーに氷を入れることは少なく、特別オーダーをする必要があります。先日、出来立てのコーヒーを飲み、すがすがしく朝の仕事に取り組んでいると、同僚が何故だかクスクス笑っています。どうやら、商品識別の為にコーヒーの蓋に書かれた黒マジックの文字がコーヒー熱で溶け、私の鼻の先端に付いた模様です。鼻は黒くなり、同僚には「たぬき(最初は英語で何を言っているかわかりませんでした)」と言われ、なかなか恥ずかしかったです。こんなにコーヒー文化が根付いているオーストラリアなので「MiningからDining～」とのスローガンに「Dining and CoffeeDrinking」が加わる日も近いのでは?と思ってしまうのは私だけでしょうか。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/7	貿易収支	11月	▲\$2985M	▲\$2906M	▲\$3247M
1/8	小売売上高[前月比]	11月	0.4%	0.4%	0.5%
1/14	雇用者数変化	12月	▲10.0千人	▲1.0千人	74.9千人
1/14	失業率	12月	5.9%	5.8%	5.8%
1/15	住宅ローン[前月比]	11月	▲0.5%	1.8%	▲0.3%
1/27	消費者物価指数[前期比/前年比]	4Q	0.3%/1.6%	0.3%/1.6%	0.5%/1.5%
1/27	CPIトリム[前期比/前年比]	4Q	0.5%/2.1%	0.5%/2.1%	0.3%/2.1%
1/27	CPI加重中央値[前期比/前年比]	4Q	0.5%/2.1%	0.5%/2.1%	0.3%/2.2%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3825 ~ 1.4800
CAD/JPY 82.00 89.00

■ 先月の為替相場

月初、原油の下値模索や中国経済の不透明感からドル買いが優勢となる中、資源国通貨には売りが強まり、ドル/カナダドルは心理的節目となっていた1.40台に上昇した。8日、12月のカナダ雇用統計では、雇用者数が2.28万人増と市場予想の1万人増を上回る堅調な内容となったことで、一時的にカナダドル買いが進んだものの、カナダドルは戻り売り意欲が旺盛で、再び下値模索の動きが続いた。その後も原油の下げは止まらず30ドルを割り込む展開となり、また、カナダ中銀の企業景況感調査ではセンチメントの低下が鮮明となったことで、カナダ経済への懸念が高まったため、ドル/カナダドルは急騰し1.4660まで上昇した。

月中、引き続きカナダドルは軟調に推移し、ドル/カナダドルは一時1.4690まで上値を伸ばす中、カナダ中銀の政策委員会が行われ、市場では半分近く政策金利の利下げを見込んでいたものの、結果は0.50%に据え置くことを決定した。また、声明では市場予想以上に経済について強気姿勢を堅持し、GDP見通しは下方修正したもの、原油の影響は2016年中盤にはピークを向かえるとし、また財政刺激策への期待を示した。同時に非エネルギー企業の輸出の強さも指摘するなど、全体的にこれまでとトーンは変わっておらず、市場が期待していたほどハト派な声明文とならなかったことから、カナダドルは急速に買い戻され、ドル/カナダドルは1.4492まで下落した。しかし、原油価格が約12年8か月ぶりの安値水準となる一時26ドル台前半まで下落したことが、市場全体の警戒感を強め、リスク回避の動きが優勢となり、ドル/カナダドルは再び1.46台半ば水準に上昇した。

月後半、欧州中央銀行による追加の金融緩和観測や、中国が中東問題に積極的に関与する方針が伝えられることをきっかけに、リスク回避ムードが大きく後退し、原油相場にショートカバーが強まると、カナダドルの買い戻しが優勢となり、ドル/カナダドルは1.4115まで軟化した。

■ 今月の見通し

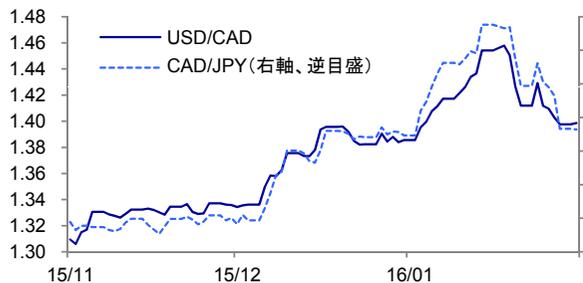
年初から波乱の幕開けとなり、中国、中東情勢、原油安といった材料を昨年からの材料を引き継いで、市場はリスク回避の雰囲気強めている。中国経済が中国株の下落を伴いながらスローダウンしており、同国の成長率は今後著しく鈍化し、世界経済の成長減速に繋がる可能性は排除できない。地政学リスクについては、不透明感が和らぐことは直ぐにはないと考えると、市場の戻りのスピードは鈍いと考えられる。そのような状況下で原油などのエネルギー価格の動向は大幅に低下を見せており、しかもイランの制裁解除に伴う供給過剰懸念も高まる中、足元では短期的な売りは一服しているものの、原油安は長期化の可能性がある。エネルギー価格の下落はカナダ資源関連産業の業績を圧迫し、雇用情勢の悪化を招くとの見方が多く、カナダ中銀の追加利下げ期待も根強くあることから、カナダドル売りが入りやすい状況は続くだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

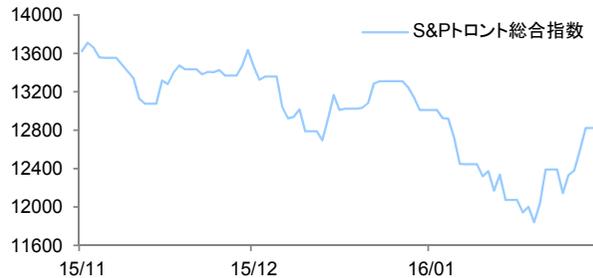
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/8	失業率	12月	7.1%	7.1%	7.1%
1/8	雇用ネット変化率	12月	10.0K	22.8K	-35.7K
1/8	正規雇用者数変化	12月	-	-6.4	36.6
1/8	非常勤雇用者数変化	12月	-	29.2	-72.3
1/20	製造業売上高(前月比)	11月	0.5%	1.0%	-1.3%
1/20	カナダ銀行翌日物貸出金利	11月	0.5%	0.5%	0.5%
1/22	小売売上高(前月比)	11月	0.2%	1.7%	0.1%
1/22	消費者物価指数(前年比)	12月	1.7%	1.6%	1.4%
1/22	CPIコア(前年比)	12月	2.0%	1.9%	2.0%
1/29	GDP(前月比)	11月	0.3%	0.3%	0.0%
1/29	GDP(前年比)	11月	0.2%	0.2%	-0.2%

(資料) ブルームバーク

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1185	~	1225
KRW/JPY	9.72	~	10.20
JPY/KRW	9.80	~	10.29

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 吉田 史門

■ 先月の為替相場

1月のドル/ウォンは、5年ぶりの高値を更新。

月初のドル/ウォンは、上昇。4日に1178.0ウォンで取引を開始したドル/ウォンは、不安定な中東情勢や中国株式市場の急落を受けて、リスセンチメントが悪化する中、大幅に上昇。また、北朝鮮が水爆実験を行ったと発表したことを受けて、7日にドル/ウォンは節目である1200ウォンを突破。その後、当局による介入警戒感が強まったことや、人民元が9営業日ぶりに人民元高に設定されたことを受けて、ドル/ウォンは一時上げ幅を縮小し、1200ウォンをわずかに下回る水準で12月米雇用統計を迎えた。

月央のドル/ウォンは、5年ぶりの高値を更新した。8日に発表された12月米雇用統計が良好な結果となったことから、11日のドル/ウォンは5年ぶりの高値を更新。また、北朝鮮をけん制する目的で米爆撃機(B52)が韓国に配置されるなど地政学リスクが高まったことや、WTI原油価格が節目の30ドル台を下回ったことも、ドル/ウォン上昇の支援材料となった。ただし、当局による為替介入への警戒感が強かったこともあり、その後のドル/ウォンは、上値の重い展開となった。14日の韓国銀行金融通貨委員会では、市場の予想通り、金融政策の現状維持が決定された。また、2016年の経済見通しは+3.0% (10月時点は+3.2%)、物価見通しは+1.4% (10月時点は+1.7%)と共に下方修正されたものの、想定範囲内だったことから相場への影響は限定的となった。

月末のドル/ウォンは上げ幅を小幅に縮小。21日のECB理事会でドラギ総裁が次回3月の会合での追加金融緩和を示唆したことをきっかけに、リスセンチメントが改善し、ドル/ウォンは1190ウォン台まで下落。FOMCが世界景気に対する懸念を示したことや日銀が「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」を発表したことで、ドル/ウォンは再び1200ウォン台まで上昇する場面も見られたが、結局、前月末対比+26.6ウォン安の1199.1ウォンで取引を終了した。

■ 今月の見通し

2月のドル/ウォンは、高値圏での膠着相場が予想される。

不透明感の強い中国経済や底値が見えない原油価格などの影響を受けて、1月のドル/ウォンは5年ぶりの高値を更新した。1月に発表された中国の経済指標が総じて低調だったことや、原油生産国の発言等から判断すると、足許のリスクオフ地合いは当面解消されないと見込んでいる。加えて、北朝鮮が水爆実験の実施・成功したと発表したことを受けて、地政学的リスクが高まっていることもリスセンチメントを悪化させている。かかる中、2月のドル/ウォンは上値を試す相場展開が予想される。

一方、ドル/ウォンが上値を試すタイミングでは為替介入への警戒感が高まる場面が散見された。当局は足許の為替水準について、特段コメントを出していないものの、急激な変動に対してスムーズオペレーションを実施する可能性は高く、市場の警戒感も高い。また、韓国銀行の経済成長見通しは下方修正されたものの、総裁会見の内容が総じてタカ派的な印象が強い。これを受けて、韓国銀行による利下げへの期待がやや後退したこともドル/ウォンの重しとなるだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

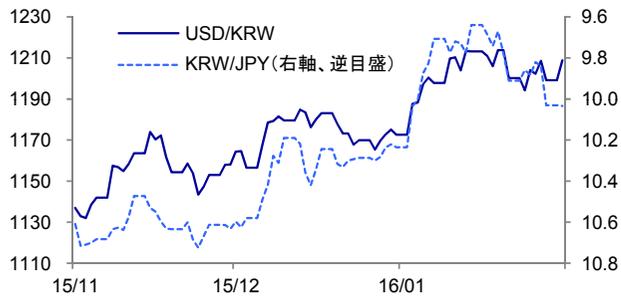
韓国の方々にはコーヒーが好きで、現地スタッフも昼食後には基本的にカフェに行き、コーヒーを買って戻ってくる、もしくは、コーヒーを飲んでくることが一般的です。韓国農林畜産食品部によれば、韓国人はキムチよりも、コーヒーの方が摂取頻度が高いとまで発表されております。このせいなのか、韓国の某コーヒーチェーン店に関して、世界で一番店舗数が多いだとか、全世界の中で韓国が一番値段が高いと言われてます。

ただし、韓国でコーヒーといえば、エスプレッソをお湯で割ったアメリカノが主流で、場合によっては麦茶かと思うくらいかなり薄くしたのも目にします。なぜこの薄さが一般的なのか分かりませんが、基本的に韓国料理で辛いものは須らく味が薄いので、その関係だと勝手に思っております。ですので、一人当たりコーヒーの消費量となると、国際的には比較的順位は高くないようです。

また、コーヒーがメジャーな一方で、昔ながらの喫茶店的なところや食堂では、韓国の伝統のお茶を楽しむこともできます。ユジャチャ(柚子茶)、テチュチャ(ナツメ茶)、モグアチャ(カリン茶)、サンファタン(双和湯)やオミジャチャ(五味子茶)などなど、日本では見られない、恐らく体にはいいのであろうお茶を飲むことができます。茶葉ではなく、作るのに手間かかるものであるため、お土産では持つて買えることのできるくらいのもので、韓国にいらっしやっただ際には(薄いアメリカノも含めて)挑戦してみてください。(山口)

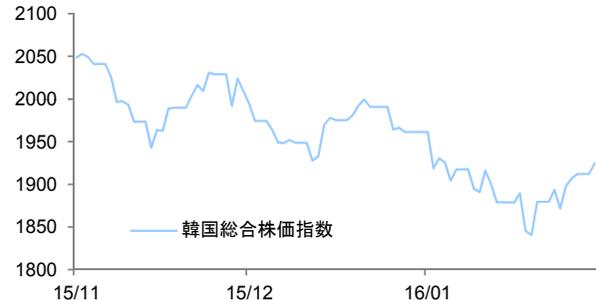
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/1	輸出(前年比)	Dec	-11.7%	-13.8%	-4.7%
1/1	輸入(前年比)	Dec	-18.0%	-19.2%	-17.6%
1/1	貿易収支	Dec	\$8735m	\$7162m	\$10361m
1/13	失業率(季調済)	Dec	3.5%	3.4%	3.4%
1/14	韓国銀行7日間レポレート	Jan	1.5%	1.5%	1.5%
1/26	GDP(前年比)	4Q P	3.0%	3.0%	2.7%
1/27	ディスカウントストア売上高(前年比)	Dec	-	-5.1%	-3.7%
1/27	百貨店売上高(前年比)	Dec	-	-5.7%	1.0%
1/29	鉱工業生産(前年比)	Dec	-3.3%	-1.9%	-0.3%

(資料)ブルームバーグ

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.75 ~ 34.00
TWD/JPY 3.51 ~ 3.75

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

1月のドル/台湾ドル相場は、結果的には小幅安。

1月のドル/台湾ドル相場は、32.90近辺でオープン。上海株や人民元の大暴落など、年始からリスク回避ムードが急激に高まる展開の中、33.00付近へ台湾ドル安が進行。中東地政学リスクの高まりや北朝鮮の核実験なども重なり、市場の混乱が続くなか、5日は33.10、6日は33.20、7日には33.30付近へと台湾ドル安が継続。8日は、上海株式市場で落ち着きが見られたことで、33.30付近となった。

11日は、前週発表の強い米12月雇用統計や弱い台湾12月貿易統計を受けて、33.40付近へ台湾ドルが下落。12、13日は、人民元の反発を受け、市場心理は若干、改善したが、台湾ドル反発は限定的で、33.40付近で膠着。但し、再度、リスク回避ムードが高まったことや、台湾総統選挙を控えて、外国人投資家の台湾株式の売り越しも目立ち、14日は33.50台、15日は、33.60付近へ台湾ドル安となった。18日は、33.60付近で一進一退。総統選挙を受けた動きは特段見られず。19日は、中国経済統計発表などのイベントは無難な内容となったものの、台湾輸出企業の様子見姿勢が強く、台湾ドル安の動きとなり、33.70付近での取引。20、21日は、各国株式市場の下落が目立つ中、台湾ドル安は続き、33.80に迫る場面も見られた。22日は、前日のドラッグECB総裁会見を受け、ECB緩和期待により、リスク回避ムードが和らぎ、33.60付近まで反発。

25日も、市場心理改善が続き、33.50台前半まで台湾ドル高。但し、原油価格などのリスク資産の動向やFOMC、日銀会合を控えるタイミングで、市場心理は改善一方とはならず、26、27日は、小幅台湾ドル安となり、33.60付近での取引。28日は、前日発表のFOMC声明は、小幅米ドル安での反応となったものの、台湾ドルの反応は鈍く、33.60付近での動きが継続。29日は、米ドル安が進んでいたことや台湾株式が上昇で始まったことで台湾ドル高進行で推移。さらに日銀追加緩和決定後、株式が一段高となり、午後の取引では台湾ドル高が加速。一時、33.20台をつけるなど、荒い展開の中、結局は33.30台後半での取引となった。30日は土曜営業日。前日の米ドル高の動きを受け、33.40台まで小幅安。

■ 今月の見通し

2月のドル/台湾ドル相場は、小幅台湾ドル高を見込む。

台湾12月貿易統計(米ドル換算)では輸出入とも大きく減少し、貿易黒字は前年とほぼ同水準。年間貿易黒字は、前年比+30%増となった。12月消費者物価指数(CPI)は、4か月連続でプラスとなったが、生鮮品価格高騰の落ち着きとともに、上昇幅は縮小している。15年4Q GDPは、前年比▲0.28%。マイナスとなるも、市場予想は上回る結果となった。一方、輸出受注、鉱工業生産などの低迷も続き、じわじわと失業率も上昇するなど、経済統計を見る限り、まだ好転の兆しが見えない状況が続いている。

2月の台湾ドルは米ドル次第。中国経済への懸念や原油価格動向など不透明な要因は払拭されたわけではなく、日銀緩和を機に市場心理が持ち直し、改善が続くか見極めは必要。このため、急激なリスクオフ局面が起きないという前提とならざるを得ないが、その場合は、米金融政策への見通しを受けた米ドル動向が台湾ドルの方向感を定めることとなる。台湾の金融政策見直しについては、市場予想は上回ったものの、15年4Q GDPがマイナスとなったことを踏まえると、3月の利下げはすでにある程度、織り込まれた状態であり、不確定要素は米金融政策。先月の米主要経済統計では市場予想を下回る結果も多く、米ドル上昇の勢いは感じられない。円やユーロなどの動きを受けた相対的な米ドル上昇ではなく、米経済統計を受けた米利上げ観測による絶対的な米ドル高こそ台湾ドル安に繋がるが、現時点ではこのような展開が再開するとの確信は持ちにくい。1月の台湾ドル安進行を取り戻す形で小幅台湾ドル安の進行を見込む。

なお、2006年から2015年の旧正月前後の台湾ドル相場の動きを見ると、台湾ドル高4回、台湾ドル安2回、ほぼ変わらず(0.05以下の動き)4回ということに特に目立った傾向は無い。但し、今年は、米1月雇用統計発表の翌営業日から旧正月休暇となるが、3月米利上げ観測に大きく影響を与える結果となった場合は、相応の動きが出てくるだろう。但し、同時期に休まず中国大陸発のリスクイベントは発生しない点は安心材料と言えるだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

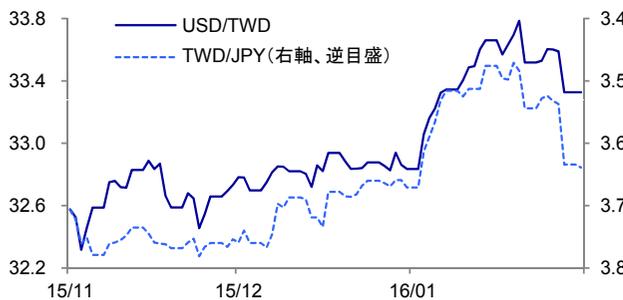
コーヒー店は多いです。海外大手チェーンの他、地場コーヒーチェーンも多くあり、コンビニでも出来たてコーヒーが買えます。値段は、カフェラテで60元前後、コンビニはもう少し安いですが、味は若干薄くなります。

お茶は、コンビニでは飲めない分、コーヒー店より、店舗数は劣るものの、それでも街角に多数あります。緑茶など、いわゆるお茶の他、タピオカミルクティーなども売っており、特に夏場は、店先が賑わっています。値段はコーヒーより安く、基本的にテイクアウトとなります。鉄観音ラテとか、台湾に来て初めて飲みましたが、絶妙の組み合わせで、実に美味しいです。お茶系飲料の難しいところは、店での注文です。コーヒー店は「ラテ」に相当する中国語を言えば、事足りますが、お茶系だと、「ミルクティー」といっても、鉄観音、タピオカ入り、小豆入り、、、など、種類が多く、さらに砂糖や氷の量なども伝える必要があります。メニューを指差そうにも、天井からメニューがぶら下がっていると、指差すあたりは漠然とし、通じません。筆談でも良いですが、当地の漢字だと、「鐵觀音」のように画数が多く、メニューの表記を正確に真似出来ず、漠然とした字になります。これらの苦労を経て、携帯でメニューの写真を撮って、写真を指差して注文することを覚えました。

その他、お茶の葉も台湾土産の定番です。お茶屋で試飲すると、感動して、たくさん買ってしまふことが良くあります。赴任前に、台湾に旅行した際、お茶を買って帰りましたが、茶漉しとマグカップでお茶を淹れると、試飲のような味にはならず、多くを無駄にしました。高い茶葉は、結構な値段がするので、そもそも日常生活でお茶を飲むか、自問自答したうえで買いましょう。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/6	CPI (前年比)	12月	0.45%	0.14%	0.53%
1/8	輸出 (前年比)	12月	-13.00%	-13.90%	-16.90%
1/8	輸入 (前年比)	12月	-12.50%	-15.60%	-13.70%
1/20	輸出受注 (前年比)	12月	-7.00%	-12.30%	-6.30%
1/22	失業率	12月	3.85%	3.88%	3.84%
1/22	鉱工業生産 (前年比)	12月	-5.60%	-6.17%	-4.94%
1/29	GDP (前年比)	4Q	-0.50%	-0.28%	-0.63%

(資料)ブルームバーグ

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7700 ~ 7.8300
HKD/JPY 15.20 ~ 15.80

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【1月の香港ドル直物相場】

FRBの利上げを受けて月初から弱含みに推移していた香港ドルは、1月中旬に下落が加速し、一時、2007年の金融危機以来となる安値1ドル=7.82香港ドルを付けた。人民元の先安感が香港ドルの先安感につながる中で、中国経済の減速と資本流出への懸念が香港にも波及し、ハンセン株価指数は20000の大口を割り込んだ。また、1年もの香港ドル先物フォワードポイントは800ポイントを超え、1年もの先物相場はペッグ制における取引レンジの最香港ドル安水準である1ドル=7.85香港ドルを下回る水準まで下落した。最近の香港ドルの下落は、株式市場や不動産市場の投資資金が域外に流出し、香港市場で資本流出懸念が強まっていることを示唆していると考えられる。

【1月の香港ドル金利】

銀行間市場の短期流動性を表すアグリゲートバランス(香港金融管理局(HKMA)決済性預金残高)は3700億香港ドルと高いレベルを維持したものの、最近の香港ドルの値動きを受けた資金流出懸念により、香港ドル金利は急騰した。3ヶ月物のHIBORは数日間で0.5%を上回るレベルに上昇した。米ドルと香港ドルの金利スプレッドも大幅に縮まった。HIBOR-LIBORベシススワップも一時的に上昇し、長期的に見れば香港ドルの資金調達コストが上昇することを示唆している。

【1月の香港株式市場】

ハンセン指数は20000の大口を割り込んだ後、19000ポイントを下回るレベルまで急落した。株式市場は2016年初から原油下落、中国経済減速への懸念やマーケット改革などのリスクに晒されている。また、資金流出により軟調に推移している香港ドルや香港ドル金利の上昇なども、香港株式の下押し圧力となっている。

■ 今月の見通し

【2月の香港ドル直物相場】

中国経済の先行き不透明感が嫌気され香港ドル売りを誘ったものの、HKMAの外貨準備高(3588億ドル)を勘案すると、米ドルとのペッグ制が短期的に崩れるとは考えられない。しかしながら、資金流出をめぐる懸念が香港ドルの重石となっており、短期的にはペッグ制の香港ドル安サイドの限度である7.85香港ドルまで迫る可能性がある。中国経済が足踏みを続ける限り、香港ドル安圧力が依然としてくすぶり、当面は対ドルで7.8香港ドル前後で推移すると見込まれる。

【2月の香港ドル金利市場】

香港ドルが1ドル=7.85香港ドルという変動幅の香港ドル安限度を抜け出す兆候があれば、HKMAは香港ドル買い介入を行い、ペッグを維持しなければならない。そうすると、香港ドル市場の流動性は減少し、香港ドル金利もそれに追随して上昇するだろう。我々は香港ドル金利が更に上昇すると想定し、3ヶ月物香港ドルHIBORは3ヶ月物米ドルLIBORに追随する形で推移するものと予想する。但し、流動性は潤沢であることから、HIBORが急騰するリスクは限定的と言えよう。一方で長期ベシススワップは、資金流出への懸念やドルとのペッグ制廃止への懸念から、Hibor-Liborベシススワップ(Hi-Li)は高値圏で推移する見込み。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

香港は土地が狭く農地が少ないため、お茶は当地ではほとんど生産されていない。そのため、香港では基本的には世界各地から輸入したお茶やコーヒーを楽しんでいる。その中で、最も香港人の生活に浸透したのは中国茶。香港で中国茶を味わう一番おすすめの方法は、家族や友人と飲茶で点心を食べながらお茶を頂くこと。他の香港人に好まれるお茶は日本の抹茶であり、抹茶を使って作り上げたパフェやケーキなどは長年人気を集めている。しかし、会社の中では、一番飲まれているのはやはりインスタントコーヒーとお茶となる。仕事の忙しい都会人にとっては、コーヒーを飲む時間も贅沢なひとときだろう。

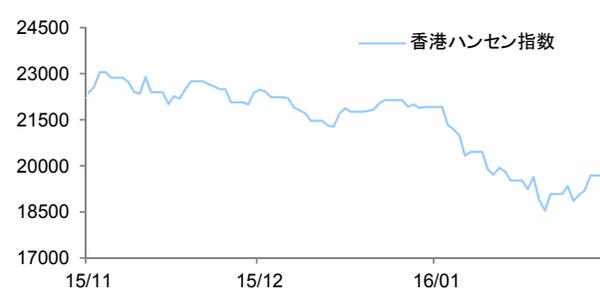
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	小売売上高(価額, 前年比)	11月	--	-7.80%	-3.00%
1/4	小売売上高(数量, 前年比)	11月	--	-6.00%	1.20%
1/6	日経香港PMI	12月	--	46.4	46.6
1/7	外貨準備高	12月	--	\$358.8b	\$355.8b
1/19	失業率(季調済)	12月	--	3.30%	3.30%
1/21	CPI(コンボジット(前年比))	12月	--	2.50%	2.40%
1/26	輸出(前年比)	12月	--	-1.10%	-3.50%
1/26	輸入(前年比)	12月	--	-4.60%	-8.10%
1/26	貿易収支	12月	--	-45.7b	-33.1b
1/29	財政収支(香港ドル)	12月	--	--	25.4b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.4600 ~ 6.9000
 CNY/JPY 16.81 ~ 19.22
 100JPY/CNY 5.2000 ~ 5.7900

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 大内 聡

■ 先月の為替相場

【為替市場:】

4日よりインターバンク外国為替市場の取引時間延長(23:30まで)が開始。年初のドル人民元相場では人民銀行仲値が連日元安値を更新。実勢相場は5年ぶりの元安値を更新した。オフショア人民元相場も人民銀行仲値の元安設定を受けて、元安が進行。7日にはオン・オフの1時1600pipsまで拡大。しかしながら、12日のCNH HIBOR翌日物66.815% (年率) に設定され、オフショア人民元の流動性が極端に枯渇。市場では、オフショア人民元の流動性を抑制することでオフショア元金利を高めに誘導し、元売りポジション保有者へのけん制を狙う措置と受け止められ、オフショア市場では急激な元高によりオン・オフ乖離が一時逆転する場面も見られた。中旬以降のドル元相場では人民銀行仲値を6.56前半～6.55後半で設定。実勢相場も月末にかけては6.58がレジスタンスとなり、上値重い推移となった。日中の相場変動率は大幅に縮小しており、昨年8月11日の人民元水準調整前の変動率に戻っている状況。人民銀行は17日、オフショア人民元業務の参加行が中国本土銀行に預けているオフショア人民元預金について、預金準備率を適用(25日より施行)すると通知。市場では再び、元売りポジション保有者へのけん制措置と受け止められ、オフショア人民元は一時元高に反応したものの、月末にかけては再び元安が進み、オン・オフで300pips程度の乖離が生じている。

【金利相場:流動性は安定した状況が継続】

1月の金利市場は、年初は市場流動性がタイトとなる場面も見られた。しかしながら、大規模なリバースレポの実施により、週末にかけて資金市場は落ち着いた推移となった。その後は、上海株急落に加えて、四半期の納税時期・旧正月などを控え、資金需要は一定の高まりを見せていたものの、当局によるリバースレポの規模が市場予想を上回る規模であったことから、資金市場は安定的な推移となった。月末にかけては単週で1.3兆元の資金が供給されるなど、当局による大規模な資金供給により、資金需要の高まる時期であったものの、金利水準は安定。

■ 今月の見通し

【為替市場】

人民元為替市場は年明けから大きく動いたが、月末にかけては当局による為替市場へのコントロールが効きはじめたことや、旧正月を前にポジションの偏りが徐々に調整されたこと等もあり、安定的に推移。今月は旧正月の長期休暇を挟む為、営業日数が少ないことや、3月に控える全人代に向けて安定的に推移することが想定される。一方で株式市場の乱高下は引き続き続いており、先月は株式市場がバブルの兆しを見せ始めた2014年以来の水準まで落ち込んでおり、株式市場の下落が続くような場合には資本流出への懸念から一段と人民元安が進行する可能性もある点には注意が必要。オフショア市場との乖離は300pips台で横ばい圏での推移。当局によるオフショア市場への介入と思しきドル売りフローも断続的にみられており、予断を許さない状況が継続している。

【金利相場】

先月、当局は1兆元を超える規模の流動性供給を実施。旧正月の長期休暇を前にした、資金需要に対応したものとみられる。一方、当局からは新規融資額の増額をけん制するような発言も出ており、今後の動向には留意する必要がある。また足許の安定した金利環境は当局による資金供給と、一部の銀行による資金供給によるものであり、当該金融機関の動向には市場関係者の注目が集まっている。月初は長期休暇前ということもあり、金利上昇バイアスが高まりやすい局面が継続することが想定される。

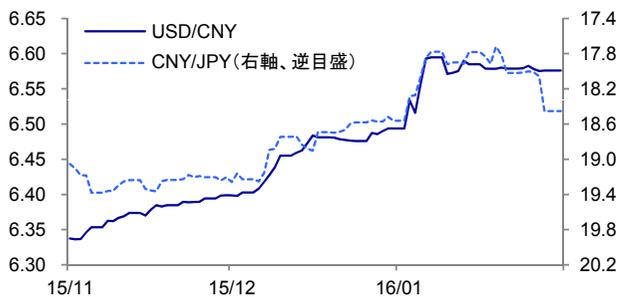
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

中国はお茶の発祥地ともいわれ、地域や季節によって実に様々なお茶が存在しております。ここ中国ではペットボトルのお茶はジュースと認定されており、砂糖入りのものが多いのは有名なお話でございますが、中国では何処も彼処もみなさんマイボトルにお茶とお茶葉を入れて持ち歩いております。わが部室でもほとんどの人がマイカップを持参。部室内に設置してあるウォーターサーバーからお湯を注ぎ、お茶を入れております。私も中国茶が大好きなのですが、唯一苦手なことがあります。それは、カップにお茶葉をそのまま入れて飲む場合、お茶の葉が非常に邪魔になることです。菊花茶に至っては水の表面に花が浮いておる状態でその花をかき分けながらお茶を啜らないといけません。飲みづらい事この上ない。ただ、中国人の方は同じ状態でも器用で飲んでおりますので、これができるようになれば私の上海駐在員生活の一つの功績となるのではとただ今練習中でございます。

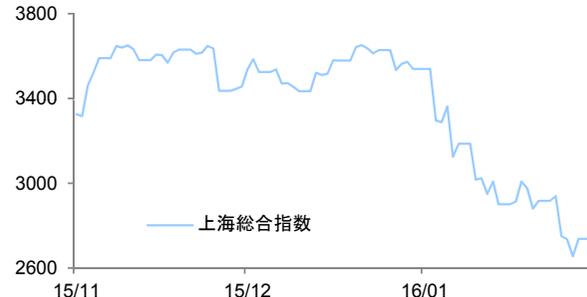
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/1	製造業PMI	12月	49.8	49.7	49.6
1/13	貿易収支 (USD)	12月	51.3B	60.1B	54.1B
1/13	輸出 (前年比)	12月	-8.0%	-1.4%	-6.8%
1/13	輸入 (前年比)	12月	-11.0%	-7.6%	-8.7%
1/9	CPI (前年比)	12月	1.6%	1.6%	1.5%
1/9	PPI (前年比)	12月	-5.8%	-5.9%	-5.9%
1/19	小売売上高 (前年比)	12月	11.3%	11.1%	11.2%
1/19	鉱工業生産 (前年比)	12月	6.0%	5.9%	6.2%
1/19	GDP	4Q	6.9%	6.8%	6.9%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.4050 ~ 1.4450
SGD/JPY 82.40 ~ 85.00

シンガポール資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

1月のシンガポールドル(SGD)相場は、人民元相場の不安定化をはじめ金融市場が大きく変動した中で6年半ぶり安値へ下落した。2015年末より中国経済の先行き不透明感から人民元、中国株に売り圧力が強まっていたが、2016年の金融市場は波乱の幕開けとなった。サウジアラビア・イランの関係悪化は周辺国を巻き込み中東全体に拡大。地政学的リスクの高まりを受けて原油、株式が急落。更に北朝鮮の水爆実験、中国12月Caixinサービス業PMIの悪化が重なり、リスク回避のため新興国市場から資金流出が加速した。この間中国株は±7%超の変動で終日の取引が終了されるサーキットブレーカーを2度発動して急落。人民元はオフショア(CNH)主導でオンショア(CNY)でも急落し、市場では人民元再切り下げの思惑も出た。

中国の不透明感や、原油の供給過剰感はずぐに改善が見込めるものではないため、市場のリスクセンチメントは相当悪化した。この混乱の中で、SGDも年明けの1.41台後半から11日には1.44台半ば近くまで売られ、2009年7月以来の対ドル安値をつけた。しかし、人民元相場は連日の介入と、CNH流動性引き締めなどにより11日以降はほぼ落ち着いた。これに伴いSGDも徐々に落ち着きを取り戻した。その後、15日のジャカルタ爆破テロ発生時に売られるなど神経質な値動きはあったものの、11日から15日の間はSGDは1.43台前半から1.44台前半のレンジ内の推移に収まった。

翌週は更に落ち着きSGDは小幅反発した。15日に発表された米12月小売売上高が予想以上に悪化し、FRBの次回利上げは年央以降に先送りされるの見方が広がると、まず中国株が下げ止まり、他のアジア株も徐々に反発に向かった。人民元相場は引き続き安定推移し、下げ続けていた原油相場も値頃感からようやく下げ止まった。更に21日にはドラギECB総裁が3月の追加緩和に含みを持たせる発言を行い、相場のセンチメント改善に貢献した。この流れの中でSGDも週初の1.44近辺から22日には1.42台半ばまで反発した。

25日の週はFOMCや日銀金融政策決定会合を控えて様子見ムードが広がり、各市場とも小動きとなった。市場全体の落ち着きを受けてSGDは引き続き1.42台後半で安定的に推移した。

■ 今月の見通し

2月のシンガポールドル(SGD)相場は、中国市場や原油相場を注視しながらも比較的落ち着いた展開を予想する。

1月に金融市場の攪乱材料となった中国、及び原油相場については足許落ち着く方向にある。人民元相場は中国当局が人民元切り下げ懸念払拭に努めたこともありパニックは下火になった。再び資金流出が拡大した場合も潤沢な介入資金により人民元相場の安定を維持できるだろう。一方で中国株式市場は依然として不安定だが、人民元相場が安定していれば新興国市場からの深刻な資金流出は回避できると見ている。原油相場については、供給過剰懸念はすぐには解消されないだろうが、相場に過熱感も出てきておりこれまでのペースで下落が続くことはなさそうだ。また米利上げ先送り期待は新興国市場からの資金流出抑制に一役買っている。これらのことから新興国通貨売りはピークを越えたと思われる、2月のSGD相場は比較的落ち着いた展開を予想する。とはいえ、当面は中国経済の不透明感は一掃されず、商品市場も変動が激しいため、SGDが神経質な上げ下げを演じる可能性もある。ただ、旧正月前後は例年動意に乏しく小動きとなるため、中国や原油相場に大きな変動がなければレンジ内の取引に収斂して行く可能性が高いと見る。

4月のシンガポール金融管理局(MAS、中央銀行)定例通貨政策見直しを見据え、市場の思惑が先行してSGD安となる可能性には留意が必要か。シンガポール経済は外需の弱さがリスク要因であり、中国経済の不透明感から景気不振リスクは払拭できない。一方でインフレは落ち着いているため、市場参加者の間でMASが緩和的な政策に変更するとの思惑が強まりSGD売りが加速する可能性もある。

2月の材料は1月輸出統計(17日)、10~12月期GDP確報値(19日)、1月CPI(23日)が注目される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

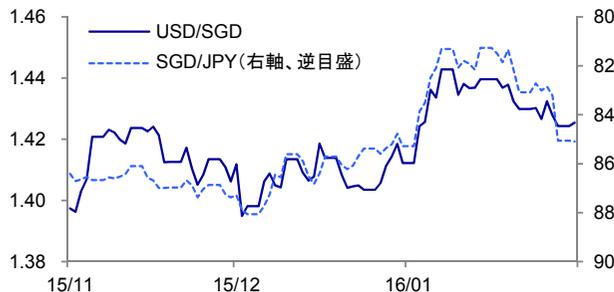
『当地のコーヒー・お茶事情』
シンガポールの国民は、その7割が中国にルーツを持っており、英国の植民地時代だったことも考えれば、コーヒーではなくてお茶か紅茶だろうと思いがちですが、当地では(前月にも一部記事がありました)コーヒーに関して独特の発展があるので今回はそちらに焦点を当てます。

シンガポールでフードコートに行くと、その名前が「Kopitiam」と書いてあることがあります。「Kopitiam」は今ではただのフードコートですが、その誕生には歴史があります。1820年、英国植民地時代に中国の海南島から職を求めてやってきた中国人は、経済繁栄の中で建設されたホテルなどで当時コックとして働いていましたが、その後の経済不況、戦争で多くの店が消滅。そうして生まれた空き店舗に、海南出身者達が独自にお店を開き始めたことが誕生のきっかけとされています。「Kopitiam」は福建語/客家語の「KOPI(Coffee)+TIAM(shop)」の複合語だそうです。

KOPIは、地元シンガポリアンが好んで飲んでいますが、コーヒーに若干のお湯、そしてコンデンスミルクやグラニュー糖が入っている、激甘ドリンクです。一応いくつか種類があり、
KOPI-C: コーヒー + お湯 + コンデンスミルク
KOPI-O: コーヒー + お湯 + 砂糖
KOPI-O-KOSONG: コーヒー + お湯
KOPI-SIEW-TAI: コーヒー + お湯 + 砂糖少な目
かなり甘いものの、シンガポールの気候や料理にマッチしているとも言われており、当地に足を運んだ際にはぜひお試しください。と、ここまでKOPIに関して色々と言いましたが、在任4年間で僕は1回しか飲んだことがありません。やはりコーヒーはスタバです。(吉田 聡)

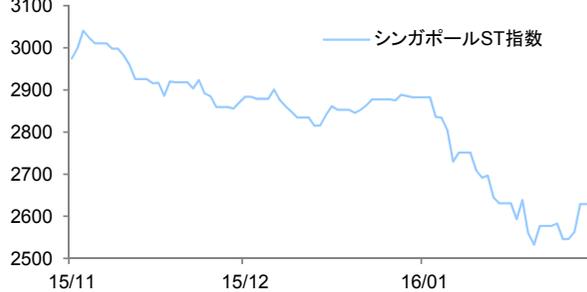
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	GDP (前年比)	4Q	1.2%	2.0%	1.8%
1/4	購買部景気数	12月	-	49.5	49.2
1/4	電子機器指数	12月	-	48.9	49.0
1/15	小売売上高 (前年比)	11月	3.4%	4.7%	2.6%
1/18	非石油輸出 (前年比)	12月	-4.4%	-7.2%	-3.4%
1/25	CPI (前年比)	12月	-0.7%	-0.6%	-0.8%
1/26	鉱工業生産 (前年比)	12月	-7.2%	-7.9%	-6.4%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.00 ~ 36.20
THB/JPY 3.30 ~ 3.50

バンコック資金室 関 浩士

■ 先月の為替相場

● リスク回避姿勢の後退にドル/パーツは下落

年初4日のドル/パーツは36.17パーツで取引を開始したが、中国株が急落し、グローバルにリスク回避の動きが拡がると、ドル/パーツは36.20パーツまで上昇し、7日に中国人民銀行による元の対ドル基準値設定が8営業日連続で元安方向に設定されると、上海株が大幅下落となる中、ドル/パーツは36.35パーツまで上昇した。8日に中国人民銀行が元の基準値を元高方向に設定したことで、市場は一旦落ち着きを見せ、アジア通貨に買戻しが入り、ドル/パーツも36.17パーツまで下落したが、海外時間に発表された米12月雇用統計が予想を上回る強い結果となると月間高値となる36.40パーツまで一気に値を戻した。

翌週11日は注目された元の基準値が2営業日連続で元高方向に設定されアジア通貨買いが優勢となると、パーツにも買戻しが入り、36.30パーツ台での推移となった。15日の海外時間に米12月小売売上高(除自動車)が予想を下回る結果(結果:▲0.1%減、予想:+0.2%増)となると、ダウが16,000ドルを割り込み、原油相場も軟調に推移すると、ドル/パーツは36.39パーツまで上昇した。翌週18日は中国人民銀行が「中国本土外の金融機関が本土内の機関に置いている預金の準備率を正常化する」と、人民元の安定化措置を打ち出したことを背景に、リスク回避姿勢が後退すると、ドル/パーツ一時36.29パーツまで下落した。19日に発表された中国の10～12月期GDPが市場予想値に近い結果となり、アジア通貨が買い優勢となると、ドル/パーツも36.27パーツまで下落した。

22日には、原油価格の上昇とECBの追加金融緩和期待を背景にリスク回避姿勢が後退すると、タイ株式市場も3日ぶりに反発上昇し、パーツ買い優勢な展開となり、25日には、ドル/パーツは35.89パーツまで下落した。然しながら海外時間に、原油価格が再び20ドル台へ下落し、欧州及び米株式が下落するリスク回避の展開になると、再び36.04パーツへ反発。26日、発表されたタイ12月貿易統計で輸出が2011年11月以降最大の落ち込みを記録したものの相場への影響は限定的であり、海外時間に原油価格の反発を受けリスク回避の動きが進むと再びドル/パーツは下落した。27日にはハト派寄りとなったFOMCを受けて35.78パーツまで続落。29日に発表された日銀追加金融緩和を受け、タイ株式市場が上昇すると、ドル/パーツは月間安値となる35.68パーツまで下落した。

■ 今月の見通し

● ドル/パーツは底堅い推移を予想する

12月のドル/パーツは、止まらない原油安が世界的な株安を誘発し、リスクオフムードが拡大する中、サウジアラビアとイランの対立を始め、緊迫化する中東情勢を受けた地政学リスクも相俟って、年初より上昇基調となったが、原油価格の下げ止まりと米利上げペースの緩やかな後退により下落する動きとなった。

米国金融政策に関しては、FF金利先物市場における3月利上げの織り込みが30%を下回るなど、FOMCで示唆された年4回の利上げペースと市場参加者の目線は依然として大きな隔りがある。1月27日に開催されたFOMCでも3月の利上げに関するコメントはなく、ドル高を押し進めるには材料不足となっている。

一方、タイの景況感については、芳しくない状況が続いている。タイ商務省発表の貿易統計では、2015年の輸出額は前年比▲5.8%減の2143.7億ドルとなり、3年連続での前年割れとなった。車両・部品を除く主要品目が軒並み低調となっており、12月は前年比▲8.7%減となり、年間を通じてマイナスが続く結果となった。中国向け輸出額については▲5.4%減となっており、同国への景気回復期待は高まる。民間を中心に今年度の輸出成長率目標の+5%の達成は難しいとの声も出てきており、先行きの不透明感は続く。また、2月3日にタイ中銀金融政策決定会合開催されるが、ウィラタイ・タイ中銀総裁はインタビューで、中国経済減速はタイへの影響はあるものの政策金利を引き下げる必要はないとし、2016年は財政刺激策で緩やかながら着実に経済は成長するとコメントしており、政策金利は1.50%での据え置きが予想される。また、原油価格の動向に注目が集まるが、イラク石油相がOPECと非OPECの間で原油供給過剰の状況に対し「若干の柔軟性」が見いだせると発言した事で、OPECへの原油生産削減にむけた協調への期待が強まっている。また、サウジアラビアとロシアが原油供給過剰解消に向け柔軟姿勢を示しているとのイラク石油相の発言等もあり、米原油先物は一時30ドル台に持ち直している。産油国のマレーシア、中国向け石炭他鉱物輸出を担うインドネシア、中国向け投資が多いシンガポールと比較すると、タイは原油輸入国であり、原油下落の直接の悪影響は少ないと言えるものの、中国、原油市場の混乱を受けた消費者心理の冷え込みはタイ経済にはマイナス要因となる。原油先物市場の不安定な動きによるリスク回避の動きは予断を許さないところであり、ドル/パーツ相場は底堅い動きが続きそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

タイのコーヒーを飲んで日本人の誰もが感じる事は「甘すぎる」ということでしょう。注文時に何も言わないと甘いコーヒーが出てくるので要注意です。飲み方と言えば氷をカップに大量に入れて、砂糖と練乳を大量に投入したコーヒーを冷やして飲むスタイルが多く、日本人の様にブラックで飲むタイ人を正直あまり見たことが有りません。缶コーヒーで「ブラック」と書いてあっても砂糖がバッチリ入っています。

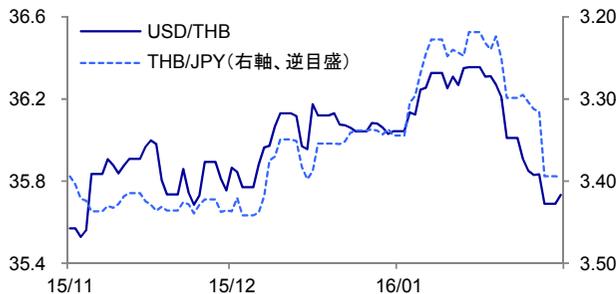
コーヒーの相場は、屋台の場合は一杯30-40パーツ前後、ショッピングモール内に出店しているコーヒーショップも50-80パーツ程度。然しながら、スターバックスでは一番安いものでも100パーツ超となっており、屋台との価格差が相応にある事からも、そのプレミアム感はあるように感じます。タイブランドのチェーン店での有名どころは、「DOI CHAAN(ドイチャーン)」という、タイ北部で採れたコーヒー豆を使うお店や、「カフェアマゾン」という、ガソリンスタンド内を中心に全国展開しているお店があります。

最近お洒落なカフェも増えてきており、フリーペーパーでの特集をよく見かけます。スペースに比較的ゆとりがある店では、自然の木を生かした緑豊かな店舗も多く、そんなタイのカフェの居心地の良さは日本以上ではないでしょうか。

最後に、失敗しない注文の仕方をご紹介します。「アイラテ、ノーシュガー、ノーシュガーナ!!!」とノーシュガーを2回強調する事で、それでもノーシュガーにならない場合もありますが、甘すぎない期待に近いアイスカフェラテを飲むことができます。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	CPI (前年比)	12月	-0.76%	-0.85%	-0.97%
1/7	消費者信頼感	12月	-	76.1	74.6
1/7	消費者景気信頼感	12月	-	65.1	63.4
1/26	通関輸出(前年比)	12月	-6.87%	-8.73%	-7.42%
1/26	通関輸入(前年比)	12月	-5.80%	-9.23%	-9.53%
1/26	通関貿易収支(USD)	12月	\$1214M	\$1487M	\$299M
1/29	製造業生産指数	12月	-0.30%	1.30%	0.30%
1/29	経常収支	12月	\$4360M	4879\$M	\$2997M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.08 ~ 4.39
MYR/JPY 27.15 ~ 29.10

シンガポール資金部 松下 哲史

■ 先月の為替相場

月初4日、マレーシアリングは4.31近辺でオープン。中国景気減速懸念を受けたリスク回避の動きに4.34台まで売込まれる。サウジアラビア・イランの緊張高まりを背景に原油価格の反発も見られたが、米原油在庫が増加を示すと供給過剰感が台頭し、WTI・ICEブレントは直近安値を更新。週央にかけてマレーシアリングは4.37台まで下落した。7日、上海株の更なる下落やマレーシア11月貿易統計の前年比悪化を背景に安値圏4.41台に突入。しかし8日に入ると、米雇用統計を控えてのアンワインドの動きもあり買い戻しが入り、4.37近辺まで反発してクローズした。

11日、4.37台前半でオープン。マレーシア11月鉱工業生産は前年比+1.8%となり16か月ぶりの低い伸びとなったものの反応は限定的だった。また、ムディーズがマレーシアの格付け見通しを「ポジティブ」から「安定的」に引き下げた。12日、WTIが2003年以降の30ドルを割り込んだものの、翌13日には予想比良好であった中国12月貿易統計や人民元相場の落ち着きを背景にリスクセンチメントは改善。強弱入り混じる材料にマレーシアリングは週半ばから後半にかけて4.39を挟んだ狭いレンジで推移し、結局4.37台半ばでクローズした。

18日、4.39近辺でオープン。イランの経済制裁解除に伴う原油増産への思惑が原油価格を大きく押し下げ、マレーシアリングも弱含み4.41台半ばまで下落。19日、一連の中国経済指標が発表されるとイベント終了後の巻き戻しにアジア通貨は反発、マレーシアリングも4.36近辺まで大きく買い進められる。20日、原油価格が直近安値を更新するとマレーシアリングは軟調に推移するも、21日にECBの追加緩和観測が高まり、リスクセンチメントが改善するとマレーシアリングは急伸。22日、4.30台をつけて高値圏でクローズした。

■ 今月の見通し

先月前半は、年明け早々からのリスクオフモードにあわせ、新興国通貨・資源国通貨であるマレーシアリングは軟調推移をするも、月後半以降は、ECBの追加緩和期待などに伴うリスクセンチメント改善を背景に買い戻しが入った。

先月のイベントとしては、まずは、マレーシア中銀(BNM)の金融政策決定会合がある。1月21日にBNMは、法定預金準備率の引き下げを発表、金融システム内の流動性を高めることで、景気へのテコ入れを図っていくことを発表した。法定預金準備率は、現在の4%から3.5%に引き下げられることとなる。また、マレーシアの11月マネタリーサプライをみても、広義のM3が前年比+3.7%増加するなど、金融機関による民間セクターへの通貨供給を通じた景気底上げはシナリオとして考えられよう。

また、1月26日には、ナジブ首相の不正献金疑惑について、マレーシア法務局から「犯罪性はない」との見解が示され、一連の捜査の終了が宣言された。引き続き、野党側からの追及の声は残るも、政治的不透明感の一旦の解消として、マレーシアリングの買い材料となろう。

一方で、原油価格の動向は気になるところであり、先月は、値動きの激しい展開を見せた。直近では、サウジアラビアとロシアが柔軟性を見せているとの報道を受け、OPEC加盟国と非加盟国による協調減産への期待が強まり、原油相場は反発するも、引き続き、下値警戒感強く、マレーシアリングも原油価格の動向に追従する可能性がある。

今月のマレーシアリング相場は、一旦はややリング高が進んだ現状レベルでの横ばい推移をメインシナリオと考えられるも、引き続き、原油価格の動向には警戒感を強めておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』
まず先にコーヒーについてですが、マレーシアと言えはやはりホワイトコーヒーが有名です。と言っても別に白い訳ではなく、ここマレーシアではコーヒーを焙煎する時にマーガリン、砂糖、小麦を加えるのが一般的なところをそれらの量を少なくして作ったので、中国語で「何も加えない」という意味の「白」で「白珈琲」が英語になったというのが由来だそうです。某米系コーヒーチェーン店と比較して値段も圧倒的に安く、幅広く飲まれている訳ですが、そもそもマレーシアはコーヒー豆の生産には適しておらず(そんなこともあってパームが栽培されるようになったとも)、今では豆の大部分を輸入に頼っているのが現状です。尚、当地ではコーヒーのことをコピ、喫茶店をコピティアムと呼びますが、格好をつけて「コピ サトゥ(コーヒー1つ)」という激甘のコーヒーが出てきます。というのもコピはコーヒー+コンデンスミルク+砂糖、なので所謂日本人が言うところのブラックコーヒーが飲みたいのであれば「コピ オ コソン」と頼まなければなりません(それで出てくるかは別問題)。次にお茶ですが、当地にはキヤメランハイランドで採れる紅茶が有名で、中でも「BOH TEA」というのがマレーシア王室御用達でマレーシアのお土産にも良く買われる美味しい紅茶です。実際にマレーシアはイギリスの植民地であったこともあり、紅茶の生産が始まったそうで、今も高級ホテルを中心にハイティアーが楽しめます。尚、このハイティアーは伝統的な三段式の他にマレー式もあって、何れを選んでも昼下がりから食べきれない量が出てくるところもあるそうで、そうだとすると折角の美味しい紅茶で流し込むしかありませんね。。。

(マレーシアみずほ 山田)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/7	輸出 (前年比)	11月	12.0%	6.3%	16.7%
1/7	輸入 (前年比)	11月	12.0%	9.1%	-0.4%
1/7	貿易収支 (MYR)	11月	12.00Bio	10.24Bio	12.16Bio
1/11	鉱工業生産 (前年比)	11月	4.1%	1.8%	4.2%
1/20	CPI	12月	2.70%	2.70%	2.60%
1/22	外貨準備高	1月	-	95.1Bio	95.3Bio

(資料) ブルームバーク

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13700 ~ 14100
 IDR/JPY 0.84 ~ 0.88
 JPY/IDR 114.00 ~ 118.45

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介
 アジア・オセアニア業務部 小泉 聡

■ 先月の為替相場

先月のドル/ルピアは13800~13900台を中心としたもみ合いとなった。

年初1月4日は13900付近でオープンし、世界的なリスク回避の流れもあったが、2015年12月のインフレ率が前月比下落したことや、好調だった国債入札がルピアを下支えし、日々の変動は激しいも、総じてルピアは安定推移が継続。また、2015年12月末の外貨準備高は前月末比大幅に上昇した。

14日にジャカルタ市内で発生した爆破事件により、多少のルピア安に振れる場面も見られたが、同日夕方に決定されたインドネシア中銀(BI)定例会合での利下げが好感され、相場への影響は限定的となった。

BIの利下げ決定後もドル/ルピアは方向感の出ないもみ合いが続き、13900前後での推移が続いている。

■ 今月の見通し

今月もルピアは方向感の出ない展開を予想するが、上値を試す場面もありそうだ。

世界的なリスク回避の流れや原油安により、アジア通貨が軟調推移を強いられているが、ルピアの下落は限定的となっており、健闘していると言える。

原油が輸入超(需要に対し、自国での生産能力が不足)であるインドネシアにとって、原油安は必ずしもネガティブ要因ではなく、むしろインフレ抑制に寄与する可能性もある。また、ECBが追加緩和を示唆し、日銀も追加緩和論が浮上するなど、ECB・日銀の追加緩和姿勢はインドネシアへの証券投資を下支えし、ルピアのサポート要因となる。

今月は2月初旬に2015年のGDP成長率が発表されるが、17・18日に予定されているBI定例会合にも注目だろう。先月、11か月ぶりに利下げが行われたが、利下げ後に目立ったルピア安の反応はなく、産業界は景気テコ入れのために更なる利下げを要望している状況だ。

また、インフレ率も下落基調を見せる中、今後もルピア相場が安定すれば、今月に追加利下げが行われる可能性もあるだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

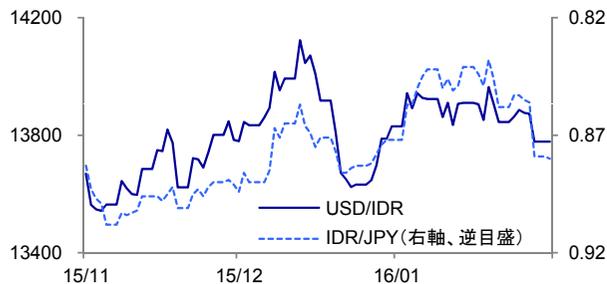
『当地のコーヒー・お茶事情』
 いつもインドネシアを訪れる出張に「何か良い土産はない?」と聞かれ、「基本的にインドネシアでは土産を探すのは難しいですが、強いて言えばコーヒーなんて良いと思います」と答えます。

インドネシアは意外にもコーヒー生産が盛んらしく、日本企業が発売した「Toarco Traja」や、有名な「Kopi Luwak (コピ・ルワック)」もあります。

コピ・ルワックはネコの糞から採られる未消化のコーヒー豆のことで、産出量が少ないため非常に高価ですが、海外でこのコーヒーを飲むのであれば、インドネシアを訪れる際、少々高くてもコーヒー豆を買った方が割安な気がします。

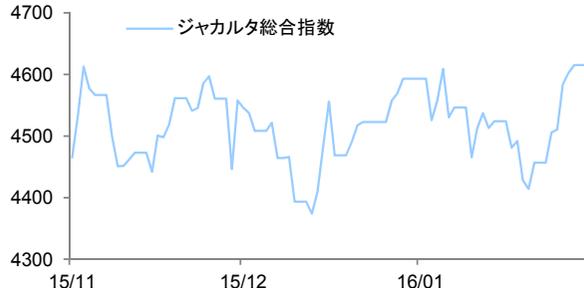
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	CPI(前年同月比)	12月	3.00%	3.35%	4.89%
1/8	外貨準備高(USD B)	12月	-	105.93	100.24
1/14	インドネシア中銀政策金利	1月	7.25%	7.25%	7.50%
1/15	貿易収支(USD M)	12月	100	-236	-346

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 47.30 ~ 48.30
PHP/JPY 2.47 ~ 2.57

マニラ支店 杉山 泰憲

■ 先月の為替相場

ドルペソは昨年12月29日のクローズ47.06ペソからややペソ高の47.00ペソで年初1月4日(月)の取引を開始。中国経済指標の弱い内容を受けて、リスク回避的なドル買いから47.15ペソ近辺までのペソ安。しかし5日(火)はフィリピン12月消費者物価指数(CPI)が予想外に強い数字となったこと、上海株式市場や人民元相場が落ち着いていたことからリスク回避スタンスが緩んでペソ買いとなって46.89ペソまでドル下落。6日(水)もオープンから46.82ペソまでペソ高に傾くが、北朝鮮の水爆実験の報道でリスク回避スタンスが強まってドル買いから47.00ペソ台を回復。7日(木)も上海株式の大幅な下落から47.17ペソまでペソが弱含み。8日(金)は中国市場の落ち着きに46.90ペソまでペソが強含むも12月雇用統計を控えてのポジション調整からドルが強含み47.165ペソにて越週となった。

11日(月)は47.30ペソで取引開始。注目された人民元の基準値はやや元高に設定されるも上海株式は5%を越える下落。リスク回避的な雰囲気は拡がりドルペソではリスク回避のドル買いが優勢となって47.35ペソまで上昇。12日(火)も流れ変わらずアジア諸国株が下落しアジア通貨安。ドルペソも47.45ペソまで上昇。中国当局がオフショア市場での元買い介入を実施しオン・オフスプレッドが縮小するも、原油安が進みリスク回避的なスタンスは払拭されず、13日(水)は47.55ペソ、14日(木)は47.75ペソ、15日(金)は47.78ペソまでペソ安が進展。47.74ペソで越週となった。

18日(月)47.80ペソで取引開始。中国リスクがやや緩んで47.65ペソまでペソが買い戻され、19日(火)の中国10~12月期GDPもほぼ予想通りであったことから更に47.58ペソまでペソが買われる。しかし、同夜の原油価格の下落から翌20日(水)はアジア株式市場が総崩れとなり、ドルペソもリスク回避のドル買いで47.89ペソまで上昇。21日(木)も更にドル買いとなって47.95ペソまで上昇。22日(金)は前夜の原油価格の下げ止まり、ダウ株値の上昇からアジア株も上昇となりリスク回避モードが緩んでややペソ買いとなって47.80ペソまで緩んで47.805ペソで週を越えた。

25日(月)は47.75ペソで取引開始。原油相場に左右される展開は変わらず、25日夜の急落からリスクオフモードが拡がり26日(火)には48.00ペソをつける。フィリピン中銀の介入とおもわれるドル売りでドル高進行が止められ47.90~48.00ペソでの攻防が続いている。

■ 今月の見通し

昨年12月の米国利上げのインパクトから落ち着き、フィリピン消費者物価が強い数字となったことで年初からドル高相場からペソ高相場に転換する期待が高まり、47ペソを下抜けし46ペソ台を一時つけるも、サウジアラビア・イランの中東問題や北朝鮮の水爆実験といった地政学リスクの高まりからのドル買いで47ペソ台に戻した。その後は原油安からの世界株値の下落相場に、リスク回避のスタンスが一層強まってほぼ一本調子にドル高・ペソ安の展開となり、フィリピン中銀は48.00ペソでドル売り介入を実施して更なるペソ安の進展に歯止めをかけている。

2015年の9月には消費者物価指数は前年比+0.4%までの低下となったものの、年末にかけて上昇を始め12月は同+1.5%となった。エルニーニョによる天候不順からの野菜等の食料価格の上昇、ペソ安進行による輸入財の価格上昇がジワリと効いてきており、これ以上の急速なペソ安進行は避けたいとの思惑から48.00ペソ近辺でフィリピン中銀はドル売り介入を実施してきている。

米国の利上げ観測の高まりはドル高・ペソ安材料となり、地政学リスクの高まりや中国経済の減速懸念という材料も、リスク回避からのドル高を招く結果となった。このように1月はドル高材料ばかりが噴出し、更にOFW送金額もピークアウトした季節的要因も重なって思わぬペソ安レベルまで相場が進行したと見ている。

5月に控えた大統領選挙の趨勢がいまだに不透明感強い中では、ペソを手放しに買える状況は訪れないと思われるものの、選挙がらみの資金の動きは活性化されるものと考えられ、2016年前半の個人消費を中心とした国内景気はかなりの盛り上がりを見せると予想される。フィリピン経済は依然良好な状態を保っており、今後の動きは外部要因次第のところがあるものの、極端なペソ安にはなりにくい、あるいは長続きはしないものと考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

スターバックスが超人気です。昼食にかかる平均コストが100ペソ以下と言われているフィリピンでは、カフェラテ・グランデが140ペソもするのはかなり高いものだと思うのですが、いつも長蛇の列で人気ぶりがうかがえます。

フィリピンのように階層の差が激しい国では「平均的な昼食費」という言い方がそもそも無意味なのでしょうが、コンビニエンスストアで、一杯用のインスタントコーヒーの袋が5ペソで売られていることを考えると、スターバックスのコーヒーの値段は高いものだと思うのです。

それにしても、いくら人気があると言っても、マカティ市内のあちこちにあるスタバ。直営方式は殆どなく、フランチャイズでオーナーがまちまちということで、出店計画もなにもない様です。

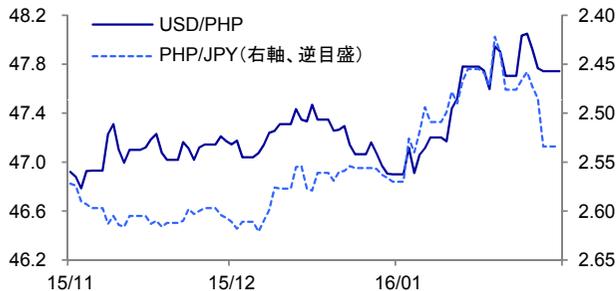
私が住んでいるビレッジ内には徒歩圏内に4店舗もありますし、同じショッピングモール内に2~3店舗あるのが当たり前となっています。

オーナーが異なるというのは面白いもので、たとえばBrewed CoffeeのRefillお替りのルールが店舗によって異なります。「一杯目の紙コップを持参」という店では、自分のマグで買ってしまっただけはリフィルできません。「レシートをもってこい」という店もあれば、「一度店を出たらダメ」と言うところもあってと、お作法が店によって異なりますので、あとになってもある事になります。

お替りすることを予め想定しているケースというのは殆どないものですから、大抵はトラブルになるのですが、「そんなことできるのか?」という店員もいたりして、つまりお替り制度を利用している私の方がレアというかケチと言うか、そういうことなんですかね?

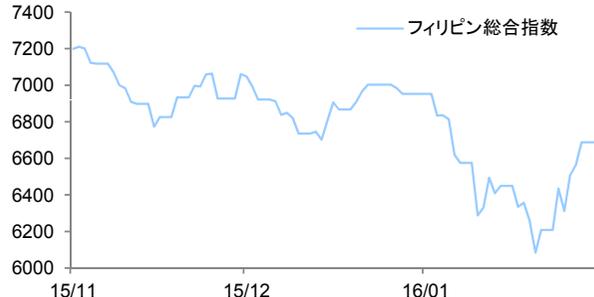
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/5	CPI (前年比)	12月	1.4%	1.5%	1.1%
1/7	外貨準備高	12月	-	806億 ^{ドル}	806億 ^{ドル}
1/12	輸出 (前年比)	11月	-15.0%	-1.1%	-10.8%
1/15	OFW送金 (前年比)	11月	3.5%	3.2%	0.2%
1/19	総合国際収支 (USD)	12月	-	481M	-141M
1/26	輸入 (前年比)	11月	16.1%	10.1%	16.9%
1/26	貿易収支 (USD)	11月	-1310M	-977M	-1944M
1/28	GDP (前年同月比)	4Q	5.9%	6.3%	6.0%

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 66.70 ~ 68.70
INR/JPY 1.74 ~ 1.86

シンガポール資金部 中野 博明

■ 先月の為替相場

1月のルピー相場は、米国の継続的な利上げの思惑及びリスクオフからルピーが急落し、対ドルで2013年9月以来のルピー安値を更新。その後も、戻りは鈍く安値圏にて推移。

1日、ドル/ルピーは66台前半から取引を開始。4日に発表された中国12月Caixin製造業PMIは予想を下回り、印12月日経PMI製造業も前月を大きく下回り、50割れの数値となったことでルピー売りが加速。北朝鮮の水爆実験報道や中国株式市場の急落、原油価格の急落も相俟って、リスクオフムードが拡がり新興国通貨が軒並み売られる中、ルピーも減価が継続し、ドル/ルピーは67手前まで上昇した。

8日、発表された米12月雇用統計は予想を上回ったものの、米国の経済回復が順調に進捗し利上げが継続的に進むとの思惑からドル買いが継続する結果となった。翌週11日以降は、原油価格が下落し、12日には2003年12月以来の1バレル30ドル割れとなった。同日発表された印11月鉱工業生産は予想を大幅に下回り、印12月消費者物価指数はほぼ予想通りだったものの、インフレ率の上昇は継続。こういった状況の中、リスクオフムードが和らぐことはなく、15日にはドル/ルピーは67台前半まで上昇した。

18日以降も、ルピーが売られる展開が継続。原油価格の大幅な下落が継続する中、リスクオフムードは継続し、20日にはドル/ルピーは68を一時突破し、2013年9月以来の28か月ぶりのルピー安値まで到達した。しかしその後、米12月消費者物価指数が市場予想を下回り、21日にはECBが3月の追加緩和を示唆したことで、リスクオフムード、ドル買いムードは収束。ドル/ルピーは67中盤まで値を戻してはいるが、戻りは鈍い。

■ 今月の見通し

2月のルピー相場は、ルピー安進行の継続を予想。

これまで対ドルで他アジア通貨をアウトパフォームしてきたインドルピーだが、1月は主要アジア通貨の中で最も売られる通貨となった。原油価格の下落はインドにとってポジティブ要因であるが、原油価格が大幅下落しているにも関わらず、貿易赤字が緩慢な改善に留まっていること及び、海外からの資金流入(直接/間接投資)に陰りが出てきていることからインドルピーが嫌気されたものと考えられる。

2016年度の予算案を決める国会が二月後半より開催予定である。今次国会において、 BJPは再びGST法案を上程する予定であるが、野党の支持を取り付け、法案通過まで至るには難しい見込み。インド準備銀行(RBI)は、今次予算にて財政赤字の削減が行われることを確認し、インフレ率の安定推移が確認できれば追加緩和に動く予想するものの、当面はマーケット及びインフレ率を注視していくと考える。

インド株式相場は、21日にSENSEX指数が24,000ポイントを割り込んで引け、2014年5月以来(総選挙直前)の水準まで下落した。モディノミクスに対する期待感依然として存在するものの、株式相場はモディノミクスへの期待を帳消しにした格好となっている。

インドは原油輸入国であることから、原油が急落するリスクオフ相場の中においても、インドルピーは相対的に堅調に推移してきた。しかしながら、鉱工業生産及びPMI指数の弱まりを受け、遅ればせながらルピー安が進行している。相場が落ち着きを取り戻せば、再びインド国内への資金流入も期待でき、株式、債券相場も堅調な推移が期待できるものの、足許は1月のような軟調推移が継続すると予想する。

インドルピーは史上最安値まであと1~2%の水準まで迫っており、もう一段のリスクオフ相場で史上最安値をトライする可能性は十分あると考える。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコーヒー・お茶事情』

インドの飲み物といえばチャイやラッシーが有名ですが、コーヒーに縁のある国でもあります。植民地時代、イギリス人がインドでコーヒーを栽培するようになったのは1840年の事、栽培史はとて古く1600年頃、イスラム教の巡礼者によってイエメンから持ち出された苗木がインドに伝わったのがはじまりと言われています。

コーヒー豆の総生産量は常に世界トップ10に入り、南インドのカルナータカ州マイソール産の「モンスーン」やケララ州産のコーヒー豆が有名です。

オフィス周辺にはローカルなものからチェーン店までいたるところでコーヒーショップを見かけます。その辺をふらふらと売り子が売り歩く小さなプラスチックカップに入ったコーヒーは約15円、コンビニのコーヒーは約100円、約3年前に登場したスターバックスのカフェラテ、ショートサイズは約300円也。

当店ではチャイを好むスタッフよりも、支店開設時に駐在していた行員が編み出したといわれる大量の砂糖とインスタントコーヒーと少量の水を混ぜ、30分ほど練ったコーヒーペーストを使用し勤務の合間にコーヒーを嗜むスタッフを多く見受けます。(長谷川)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

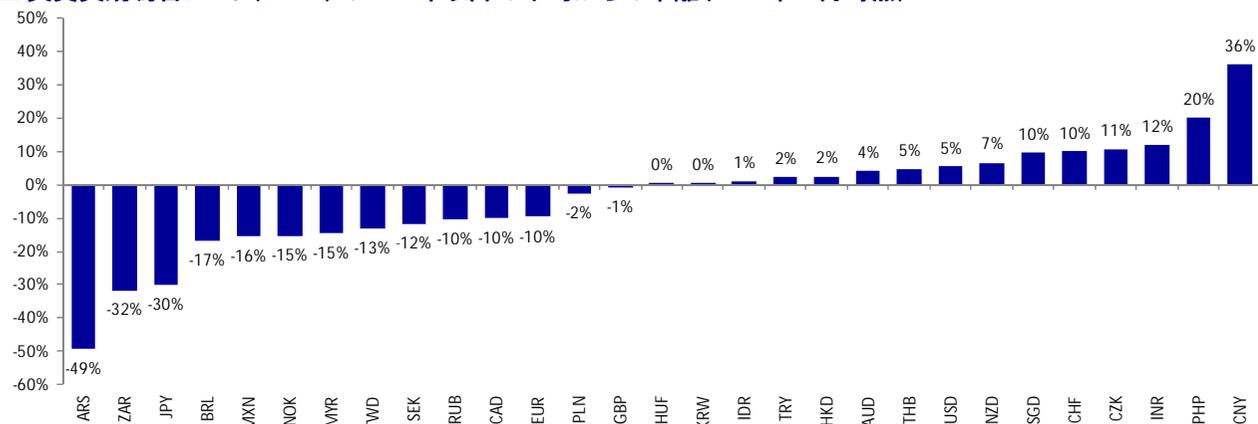
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	日経インドPMI製造業	12月	-	49.1	50.3
1/6	日経インドPMIサービス業	12月	-	53.6	50.1
1/6	日経インドPMIコンポジット	12月	-	51.6	50.2
1/12	鉱工業生産(前年比)	11月	2.0%	-3.2%	9.9%
1/12	消費者物価指数(前年比)	12月	5.53%	5.61%	5.41%
1/14	卸売物価(前年比)	12月	-1.15%	-0.73%	-1.99%
1/18	輸出(前年比)	12月	-	-14.7%	-24.4%
1/18	輸入(前年比)	12月	-	-3.9%	-30.3%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年1月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年1月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	16466.3	-5.5%	-
日本	USD/JPY	120.22	121.14	0.8%	日経平均株価	19033.71	17518.3	-8.0%	-8.7%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.0831	-0.3%	ドイツDAX指数	10743.01	9798.11	-8.8%	-8.8%
英国	GBP/USD	1.4736	1.4244	-3.3%	ロンドンFTSE100指数	6242.32	6083.79	-2.5%	0.8%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7084	-2.8%	S&P/ASX200指数	5295.9	5005.524	-5.5%	-2.8%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.3976	1.0%	S&Pトロント総合指数	13009.95	12822.13	-1.4%	-2.4%
エマーシングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.576	1.3%	上海総合	3539.182	2737.6	-22.6%	-23.6%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7863	0.5%	香港ハンセン	21914.4	19683.11	-10.2%	-10.6%
インド	USD/INR	66.1537	67.7925	2.5%	インドSENSEX30種	26117.54	24870.69	-4.8%	-7.1%
インドネシア	USD/IDR	13788	13778	-0.1%	ジャカルタ総合	4593.008	4615.163	0.5%	0.6%
韓国	USD/KRW	1175.06	1199.13	2.0%	韓国総合株価	1961.31	1912.06	-2.5%	-4.5%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	4.148	-3.4%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1667.8	-1.5%	2.0%
フィリピン	USD/PHP	46.905	47.743	1.8%	フィリピン総合	6952.08	6687.62	-3.8%	-5.5%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.4243	0.4%	シンガポールST	2882.73	2629.11	-8.8%	-9.2%
台湾	USD/TWD	32.862	33.327	1.4%	台湾加権	8338.06	8145.21	-2.3%	-3.7%
タイ	USD/THB	36.03	35.69	-0.9%	タイSET	1288.02	1300.98	1.0%	2.0%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2015年12月時点)



■ 実質GDP成長率

	2014Q2	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2014	2015
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	4.6	4.3	2.1	0.6	3.9	2.0	0.7	2.4	2.4
日本*	-7.2	-2.8	1.8	4.4	-0.5	1.0		0.0	
ユーロ圏	0.7	0.8	0.9	1.3	1.6	1.6		0.9	
英国	3.0	2.8	2.8	2.5	2.3	2.1	1.9	2.9	2.2
豪州	2.7	2.5	2.2	2.1	1.9	2.5		2.6	
カナダ*	3.5	2.1	3.4	-0.7	-0.3	2.3		2.5	
エマージングアジア									
中国	7.4	7.1	7.2	7.0	7.0	6.9	6.8	7.3	6.9
香港	2.0	2.9	2.4	2.4	2.8	2.3		2.5	
インド	6.7	8.4	6.6	7.5	7.0	7.4		0.0	
インドネシア	5.0	4.9	5.0	4.7	4.7	4.7		5.0	
韓国	3.4	3.3	2.7	2.5	2.2	2.7	3.0	3.3	3.0
マレーシア	6.5	5.6	5.7	5.6	4.9	4.7		6.0	
フィリピン	6.7	5.5	6.6	5.0	5.8	6.1	6.3	6.1	5.8
シンガポール	2.3	2.8	2.1	2.7	2.0	1.8	2.0	3.0	2.1
台湾	4.2	4.3	3.6	4.0	0.6	-0.6	-0.3	3.9	0.9
タイ	0.9	1.0	2.1	3.0	2.8	2.9		0.9	

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	15/06	15/07	15/08	15/09	15/10	15/11	15/12	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	5.3	5.3	5.1	5.1	5.0	5.0	5.0	6.2	5.3
日本	3.4	3.3	3.4	3.4	3.1	3.3	3.3	3.6	3.4
ユーロ圏	11.0	10.8	10.8	10.7	10.6	10.5		11.6	10.9
英国	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2	5.1		6.3	5.5
豪州	6.0	6.3	6.2	6.1	5.9	5.8	5.8	6.1	6.1
カナダ	6.8	6.8	7.0	7.1	7.0	7.0	7.1	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国	4.0			4.1				4.1	4.1
香港	3.2	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.2	3.3
インドネシア			6.2					5.8	6.0
韓国	3.9	3.7	3.6	3.5	3.4	3.4	3.4	3.5	3.6
マレーシア	3.1	3.2	3.2	3.2	3.1	3.2		2.9	3.1
フィリピン		6.5			5.6			6.8	6.3
シンガポール	2.0			2.0			1.9	2.0	1.9
台湾	3.8	3.7	3.7	3.8	3.8	3.8	3.9	4.0	3.8
タイ	0.8	1.0	1.0	0.8	0.9	0.9		0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	15/07	15/08	15/09	15/10	15/11	15/12	16/01	2014	2015
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	0.2	0.2	0.0	0.2	0.5	0.7		1.6	0.1
日本	0.2	0.2	0.0	0.3	0.3	0.2		2.7	0.8
ユーロ圏	0.2	0.1	-0.1	0.1	0.1	0.2	0.4	0.4	0.0
英国	0.1	0.0	-0.1	-0.1	0.1	0.2		1.5	0.0
豪州			1.5			1.7		2.5	1.5
カナダ	1.3	1.3	1.0	1.0	1.4	1.6		1.9	1.1
エマージングアジア									
中国	1.6	2.0	1.6	1.3	1.5	1.6		2.0	1.4
香港	2.5	2.4	2.0	2.4	2.4	2.5		4.4	3.0
インド	3.7	3.7	4.4	5.0	5.4	5.6		6.4	5.9
インドネシア	7.3	7.2	6.8	6.3	4.9	3.4		6.4	6.4
韓国	0.7	0.7	0.6	0.9	1.0	1.3		1.3	1.3
マレーシア	3.3	3.1	2.6	2.5	2.6	2.7		3.2	2.1
フィリピン	0.8	0.6	0.4	0.4	1.1	1.5		4.1	1.5
シンガポール	-0.4	-0.8	-0.6	-0.8	-0.8	-0.6		1.0	-0.5
台湾	-0.6	-0.4	0.3	0.3	0.5	0.1		1.2	
タイ	-1.1	-1.2	-1.1	-0.8	-1.0	-0.9		1.9	-0.9

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q1	2014Q2	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2013	2014
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.1	-2.1	-2.2	-2.3	-2.4	-2.5	-2.3	-2.3
日本	0.3	-0.1	-0.1	0.5	1.6	2.3	2.9	0.8	0.5
ユーロ圏	2.1	2.0	2.3	2.4	2.6	2.9	3.0	2.0	2.4
英国	-4.6	-4.8	-5.0	-5.1	-5.2	-5.1	-4.7	-4.5	-5.1
豪州	-2.4	-3.6	-3.3	-2.9	-3.3	-4.7		-3.5	-3.1
カナダ	-2.7	-2.5	-2.3	-2.3	-2.7	-3.0	-3.4	-3.2	-2.3
エマージングアジア									
中国	1.2	1.5	1.8	2.1	2.8	2.7	2.6	1.6	2.1
香港	1.6	2.1	1.5	1.2	1.2	2.5	3.1	1.5	1.2
インド	-1.7	-1.0	-1.2	-1.4	-1.3	-1.2	-1.1	-2.6	-1.4
インドネシア	-3.2	-3.2	-3.0	-3.1	-3.1	-2.5	-2.2	-3.3	-3.1
韓国	6.3	6.2	6.1	6.0	6.7	7.0	7.7	6.2	6.0
マレーシア	4.5	5.7	5.3	4.4	3.5	2.7	2.5	3.9	4.4
フィリピン	3.1	3.1	3.6	3.8	4.2	4.1	3.3	4.2	3.8
シンガポール	18.3	17.9	18.5	19.1	22.0	23.2	23.4	17.9	19.1
台湾	11.6	11.9	11.9	12.5	13.6	13.7	14.7	10.8	12.5
タイ	1.1	2.6	2.2	3.8	4.5	6.0	8.1	-1.1	3.8

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向		
			日付	水準 (%)	日付	(単位: bp)	日付	決定事項	
先進国									
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	緩和: 2007/9/17	5.25	2015/12/17	25	2016/1/27	現状維持	
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/1/29	現状維持	
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.05	緩和: 2011/11/3	1.50	2014/9/4	-10	2015/12/3	現状維持	
英国	バンク・レート	0.50	緩和: 2007/12/6	5.75	2009/3/5	-50	2016/1/21	現状維持	
豪州	キャッシュ・レート	2.00	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/2/3	-25	2015/12/1	現状維持	
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/1/21	現状維持	
エマージングアジア									
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp	
インド	翌日物レポ金利	6.75	緩和: 2015/1/15	8.00	2015/9/29	-50	2015/12/1	現状維持	
インドネシア	翌日物金利	7.50	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/1/14	-25	2016/1/14	-25bp	
韓国	7日物レポ金利	1.50	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/11	-25	2016/1/14	現状維持	
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2010/3/4	2.00	2014/7/10	+25	2016/1/21	現状維持	
フィリピン	翌日物金利	4.00	引き締め: 2014/7/31	3.50	2014/9/11	+25	2015/12/17	現状維持	
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2015/12/16	現状維持	
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持	

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行